

さいたま言語研究

第2号

【研究論文】

- 日中における親しさの表し方に関する考察
ーほめの返答に着目してー 戸森 優季 … 1
- 「観光日本語」とは何か
ー海外の日本語教育機関の調査と国内の現状をもとにー 田代 由貴 … 14
- 無意志自動詞の可能表現に関する研究
ー中国人日本語学習者の使用状況を中心にー 梁 笑彤 … 24
- 断り表現に関する日韓対照研究の動向
河 正一・徐 明煥 … 41

【解説論文】

- カートグラフィー概観
國谷 光 … 53

【2017年度研究大会】

- 研究大会の報告および発表の要旨 … 59

2018年3月

さいたま言語研究会

日中における親しさの表し方に関する考察

－ほめの返答に着目して－

戸森 優季

【キーワード】

ほめの返答、親しさの示し方、語用論的転移

【要旨】

本稿では、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に同等の関係における所持物のほめの返答について対照研究を行った。その中で中国人日本語学習者が日本での滞在期間の長さに関係なく、友達とのほめの返答において「親しさ」の示し方に関する語用論的転移をおこすことを明らかにした。

1. はじめに

近年、円滑な人間関係の構築に「ほめ」を活用しようという考えが日本でも広まり、「ほめ」のやりとりを含む会話は以前より身近なものとなってきた。しかし、ほめや返答においてどういった反応が好まれるかは文化によって異なることが多く、様々な文化的背景を持つ日本語学習者が日本語母語話者とのほめの場面でミス・コミュニケーションを引き起こす可能性が高い。

そこで、本研究では、日本語母語話者と日本語学習者のほめの返答における共通点と相違点を明らかにし、日本語学習者がスムーズにほめのやりとりを行うための提言を行うことを目的とする。

2. 先行研究

2-1-1 日本語のほめの返答

ほめの返答研究では男女差、地位の違いに焦点を当てた丸山（1996）の研究があり、地位が異なる場合、ほめは発生しにくく、同性同士ではほめは受入れられやすく、異性間では否定されやすいとしている。また、ほめの対象を「所持物、外見、能力、性格、その他」に分類し、所持物、外見のほめは受入れられやすいが、技量、性格については受入れられにくいとし、ほめの返答には性別、地位だけでなく、ほめの対象による影響もあると述べている。

次に平田（1999）では、女性同士や同等の地位の場合、ほめの割合が高く、返答のタイプとしては回避が最も多く、次に肯定、否定の順に多いと指摘している。

ほめの返答スタイルについて調査を行った寺尾（1996）は、テレビのトーク番組と日常会話の「聞き書き」をデータに用い、日本語母語話者の返答は回避、受入れ、否定の順に多く、ほめの返答では否定するという日本人の一般的な意識と調査結果のずれを指摘している。

2-1-2 ほめの返答における対照研究

金（2012）は同じ東アジアの国である日本と韓国の母語話者を対象に親しい友人同士の自由会話におけるほめと返答を調査し、談話レベルで分析を行った。両国の返答の共通点として「回避」や2つ以上の意味の返答を行う「複合」を多用すること、相違点は繰り返しほめられた場合、日本語母語話者は否定方向へ変化し、韓国語母語話者とは異なる傾向を示すことを明らかにした。

日本語学習者を対象にしたものでは、横田（1985）が英語を母語とする日本語学習者の語用論的転移（プラグマティック・トランスファー）について紙面の談話完成テストによる調査を行い、英語母語話者、日本語母語話者との対照研究を行った。日本語学習者の語用論的転移は顕著に見られず、返答に否定を多く使用したのは、日本語でほめられたら否定するのが一番適当であると教えられた結果ではないかと考察している。

凌（2015）は日本語母語話者との接触場面における中国人日本語学習者のほめと返答スタイルについて来日1年以内の学習者10組を対象に初対面での自由な会話を録音し、その中から「対者ほめ」と「第三者ほめ」に対する返答を調査した。「対者ほめ」の持ち物の返答では日本語母語話者は回避が100%、中国人学習者は回避と複合が50%という結果となった。

2-2 先行研究に残された課題

横田（1985）では英語を母語とする日本語学習者の調査が行われたが、日本語学習者数が一番多い中国人日本語学習者への調査も必要性が高い。中国人日本語学習者を対象にした凌（2015）では、初対面での自由会話によるデータを使い、「第三者ほめ」をはじめとする様々な対象と返答を調査することができたが、1つのほめの対象についてのデータ数が少なくなってしまうというデメリットがみられた。

そこで本調査では、ほめの対象を統一した中国人日本語学習者の返答データを集め、日本語母語話者と比較し、共通点と相違点を明らかにする。

3. 調査及び分析結果

3-1 調査方法

本調査では、丸山（1996）平田（1999）で指摘された「ほめは同性、特に女性同士、同等の関係で発生しやすい」という点を考慮し、ロールプレイの人間関係の設定を同級

生の女性同士とした。人間関係は「初めて話す相手」と「親しい友達」との2種類、ほめの対象は「かばん(所持物)」と「発表(能力)」の2つとした。また、今回はほめ(相手の評価)に対して肯定的な自己評価を持っている設定とした。

調査対象者は関東圏内の日本語学校及び大学に在学する女子学生で、年齢は19歳～29歳である。友人同士または1人での参加も可とし、1人の場合は筆者が依頼した日本人学生の協力者と会話を行った。日本語母語話者(native speakers of Japanese; 以下便宜上 JJ とする)は20名、中国人日本語学習者(Chinese learners of Japanese language; 以下 CL)は来日2年以上のグループ(Chinese learners of Japanese language: Long-term stay; 以下 CLL)が20名、来日1年以下のグループ(Chinese learners of Japanese language: Short-term stay; 以下 CLS)が16名である。ロールプレイは日本語で行うため、CLは日本語能力試験N1レベルの学習者とした。

調査方法はロールプレイによるほめの場面での会話データ、ロールプレイの会話に対するインタビュー(ほめの感想や返答理由等)の録音、アンケート(調査に対する評価、ほめに対する返答意識や感想)の記入の3つである。また、CLへはほめの返答における母語での規範意識を調べるため、ロールプレイ場面を中国語で設定した紙面での談話完成テスト(Discourse Completion Test; 以下 DCT)も実施した。調査対象者には日本語の会話に関する調査とのみ伝え、ほめの調査であることは事前に伝えなかった。

調査手順はほめ手をA、ほめの受け手をBとし、各自ロールカードを黙読後、Aから話しかける形で会話をスタートした。場面は同級生(①かばん②発表)、友達(③かばん④発表)の順で行った。以下にロールカードの一部を例として示す。

例1 同級生にかばんをほめられる場面

【ロールカードA】役割：あなたは日本人大学生です。Bさんは同じ年の中国人女子留学生で、同じクラスです。Bさんとはまだ話したことがありません。

場面①：大学でBさんに会いました。Bさんは今日とてもかわいいかばんを持っています。Bさんに話しかけてほめてください。

【ロールカードB】役割：あなたは大学の中国人留学生です。Aさんは同じ年の日本人女子学生で、あなたと同じクラスです。Aさんとはまだ話したことがありません。

場面①：あなたは今日新しいかばんを大学に持って来ました。かわいいので、そのかばんをととても気に入っています。大学でAさんが話しかけてきました。Aさんと日本語で話してください。

3-2 ほめに対する返答の分類

本論では金(2012)を支持し、ほめ及びほめに対する返答について、以下のように定義する。

ほめ：話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、直接的あるいは間接的に、肯定的な価値があると伝える言語行動である。 (金 2012 : 43)

ほめに対する返答：相手の「ほめ」に対して、ほめの受け手が明示的もしくは暗示的に行った言語行動、あるいは非言語行動である。 (金 2012 : 149)

3-3 データ及び分析結果

本調査では「かばん (所持物)」との比較のため、「発表 (能力)」のほめの返答調査も行ったが、JJ にとっては母語、CL にとっては外国語である日本語での発表に対するほめという条件の異なる会話となるため、今回は JJ、CL とも同じ条件になる「かばん (所持物)」のデータのみを取り上げ、分析する。

3-3-1 「かばん (所持物)」での返答結果

ほめと返答の数え方はほめ手が異なる言語表現で発した発話を 1 つのほめと数える。1 つのほめに対して、「肯定、回避、否定」のうちのどれか 1 つが現れる場合は「単独の返答」とし表 1 に、2 つ以上が連続して現れる場合は 1 つの「複合の返答」として数え表 2 に示した。また、表 3 に示した返答の下位分類使用総数とは、単独、複合を合わせたすべての返答で使用された下位分類を 1 つずつカウントしたものである。

下位分類は、金 (2012) を参考に、本調査データに合わせ一部項目を変更し、分類を行った。主な変更点は金 (2012) の「ほめ内容の確認」に「驚き」と「とまどい」を入れ、「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」とし、「提供の提案」に「貸与」を入れ、「貸与・提供の提案」とした。下位分類は出現数が多かった「感謝・喜び」「賛同の発言」「控えめな同意」「情報・説明」「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」と CL の特徴的な返答として本稿で取り上げた「貸与・提供の提案」の説明を本調査の会話データより抜粋した具体例 (下線部分：ほめの返答例) とともに以下に示す。

感謝・喜び：感謝あるいは喜びを表すことばを述べる。 (金 2012 : 151)

例 2 感謝・喜び

JJ1 : 今日そのかばん、すごいかわいいですね。

CLL13 : あー、ありがとうございます。

「そのかばん、かわいいですね」という JJ1 のほめに対して、CLL13 が「ありがとうございます」と感謝を述べている。

賛同の発言：ほめに対して同意する、あるいはほめの内容に対して賛成する。

(金 2012 : 151)

例3 賛同の発言

JJ2 : えっ、すごくかわいい。

CLS12 : そうですよ、私もかわいいと思って買いました、ふふ<笑い>。

JJ2 が CLS12 のかばんを「すごくかわいい」とほめ、それに対し「そうですよ、私もかわいいと思って買いました」と相手のほめに同意している。

控えめな同意：ほめに対して、全面的に受け入れるのではなく、消極的に同意する。

(金 2012 : 151)

例4 控えめな同意

JJ2 : 今日かばんかわいいですね。

CLL17 : あ、ありがとうございます。これ、お気に入りなんです。

「今日かばんかわいいですね。」という JJ2 のほめに対して、直接かわいいかどうかというほめには触れず、「お気に入りなんです。」と自分もほめられた対象に対し、肯定的な評価を持っていることを表し、控えめな同意を示している。

情報・説明：自分がほめに対してどう思うかは言わず、ほめの内容と関連する情報を述べたり、あるいはほめの対象について細かく説明したりする。ほめの内容が客観的な情報に移る、あるいは長い説明をすることに転移するため、「賛同の発言」とは異なる。
(金 2012 : 156)

例5 情報・説明

JJ1 : 今日かばんめっちゃかわいいね。

CLL13 : あー、先日買ったばかりです。

「かばんめっちゃかわいい」という JJ1 のほめに対して、「先日買ったばかり」とほめられたかばんについて説明している。

ほめ内容の確認・驚き・とまどい：ほめ手の発話に対して、本当にそう思うのか、あるいは良さを認めてくれるのかを確認する。
(金 2012 : 157)

また、驚きやとまどいを表したりすることで、肯定か否定かというほめに対する自分の意見を保留している。
(戸森 2013 : 26)

金 (2012) では「的確さへの疑問」に分類されている「そうですか」は音声的、表現的にほめ内容への強い疑念が感じられたもののみを戸森 (2013) では「的確さへの疑問」

に分類し、強い疑念が感じられないものは「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」に分類、カウントした。

例 6 ほめ内容の確認・驚き・とまどい

JJ2 : 今日、そのかばんすごくかわいいね。

CLS10 : えっ、ほんと？ありがとうございます。うん、このかばんは、えっと先週買って。

「今日、そのかばんすごくかわいいね。」という JJ2 ほめに対し、「えっ、ほんと？」と驚きとともにほめ内容の確認を行っている。

貸与・提供の提案：ほめられたものをほめ手に提供すると提案すること。

(金 2012 : 151)

例 7 貸与・提供の提案

JJ3 : あーかわいい。私もこういうの欲しいなー。

CLL3 : あ、そうなの？あー、この前ね、なんか私の誕生日の時、JJ3 からすごく、なんか、きれいな、そのー、ワンピース、もらったから、ん、もし、これ好き、好きだったら、これ使ってよ、使っていいよ。

JJ3 の「かわいい。私もこういうの欲しい」というほめに対し、CLL3 が「自分も以前、JJ3 からワンピースをもらったから、もし好きだったら、使っていいよ」とほめられたかばんの提供を提案している。

表 1 単独返答の内訳と頻度、割合（小数点第 2 位で四捨五入）

返答	下位分類	JJ		CLS		CLL	
		同級生	友達	同級生	友達	同級生	友達
肯定	感謝・喜び	16 (29.6%)	5 (8.8%)	8 (21.6%)	1 (2.4%)	19 (31.7%)	8 (15.7%)
	賛同の発言	4 (7.4%)	7 (12.3%)	0 (0.0%)	6 (14.6%)	1 (1.7%)	2 (3.9%)
	控えめな同意	3 (5.6%)	7 (12.3%)	1 (2.7%)	3 (7.3%)	1 (1.7%)	3 (5.9%)
	同意のほめ返し	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	貸与・提供の提案	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)
	誘い・紹介	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)
小計		23 (42.6%)	20 (35.1%)	9 (24.3%)	11 (26.8%)	21 (35.0%)	15 (29.4%)
否定	不賛成の発言	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
	控えめな不同意	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
小計		0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)

回避	冗談・照れ・笑い	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	情報・説明	1 (1.9%)	0 (0.0%)	2 (5.4%)	1 (2.4%)	8 (13.3%)	3 (5.9%)
	不利な情報・ほめの軽減	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)
	ほめ返し	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	ほめ内容の確認・驚き・とまどい	4 (7.4%)	2 (3.5%)	1 (2.7%)	1 (2.4%)	1 (1.7%)	4 (7.8%)
	無応答	0 (0.0%)	3 (5.3%)	1 (2.7%)	4 (9.8%)	2 (3.3%)	6 (11.8%)
	的確さへの疑問	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	話のそれ・そらし	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
小計		6 (11.1%)	8 (14.0%)	4 (10.8%)	8 (19.5%)	11 (18.3%)	14 (27.5%)
単独返答の合計		29 (53.7%)	28 (49.1%)	13 (35.1%)	20 (48.8%)	33 (55.0%)	29 (56.9%)

表2 複合返答の内訳と頻度、割合

返答		JJ		CLS		CLL	
		同級生	友達	同級生	友達	同級生	友達
無変化	肯定	7 (13.0%)	9 (15.8%)	0 (0.0%)	3 (7.3%)	6 (10.0%)	6 (11.8%)
	回避	2 (3.7%)	4 (7.0%)	1 (2.7%)	6 (14.6%)	7 (11.7%)	3 (5.9%)
小計		9 (16.7%)	13 (22.8%)	1 (2.7%)	9 (22.0%)	13 (21.7%)	9 (17.6%)
肯定方向への 変化	回避→肯定	5 (9.3%)	8 (14.0%)	18 (48.6%)	10 (24.4%)	11 (18.3%)	8 (15.7%)
	否定→肯定	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
	否定→回避	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.7%)	0 (0.0%)
小計		5 (9.3%)	8 (14.0%)	18 (48.6%)	10 (24.4%)	13 (21.7%)	8 (15.7%)
否定方向への 変化	肯定→回避	5 (9.3%)	8 (14.0%)	2 (5.4%)	1 (2.4%)	1 (1.7%)	4 (7.8%)
	小計	5 (9.3%)	8 (14.0%)	2 (5.4%)	1 (2.4%)	1 (1.7%)	4 (7.8%)
その他	回→肯→回	3 (5.6%)	0 (0.0%)	2 (5.4%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)
	肯→回→肯	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	否→回→肯	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	回→肯→回 →肯	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	回→否→回	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
小計		6 (11.1%)	0 (0.0%)	3 (8.1%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	1 (2.0%)
複合返答の合計		25 (46.3%)	29 (50.9%)	24 (64.9%)	21 (51.2%)	27 (45.0%)	22 (43.1%)

表3 返答の下位分類使用総数

返 答	下位分類	JJ		CLS		CLL	
		同級生	友達	同級生	友達	同級生	友達
肯 定	感謝・喜び	36 (40.9%)	20 (22.5%)	26 (38.8%)	9 (13.2%)	41 (46.6%)	16 (21.9%)
	賛同の発言	8 (9.1%)	20 (22.5%)	0 (0.0%)	11 (16.2%)	1 (1.1%)	11 (15.1%)
	控えめな同意	12 (13.6%)	13 (14.6%)	3 (4.5%)	4 (5.9%)	4 (4.5%)	6 (8.2%)
	同意のほめ返し	0 (0.0%)	3 (3.4%)	4 (6.0%)	2 (2.9%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)
	貸与・提供の提 案	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	2 (2.7%)
	誘い・紹介	0 (0.0%)	1 (1.1%)	2 (3.0%)	3 (4.4%)	0 (0.0%)	4 (5.5%)
小計		56 (63.6%)	57 (64.0%)	35 (52.2%)	30 (44.1%)	46 (52.3%)	40 (54.8%)
否 定	不賛成の発言	1 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	3 (3.4%)	0 (0.0%)
	控えめな不同意	1 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
小計		2 (2.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	3 (3.4%)	0 (0.0%)
回 避	冗談・照れ・笑 い	2 (2.3%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)	2 (2.9%)	1 (1.1%)	1 (1.4%)
	情報・説明	13 (14.8%)	8 (9.0%)	8 (11.9%)	9 (13.2%)	15 (17.0%)	9 (12.3%)
	不利な情報・ほ めの軽減	1 (1.1%)	4 (4.5%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)
	ほめ返し	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)
	ほめ内容の確認 ・驚き・とまど い	14 (15.9%)	13 (14.6%)	23 (34.3%)	19 (27.9%)	19 (21.6%)	16 (21.9%)
	無応答	0 (0.0%)	4 (4.5%)	1 (1.5%)	5 (7.4%)	3 (3.4%)	6 (8.2%)
	的確さへの疑問	0 (0.0%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	話のそれ・そら し	0 (0.0%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
小計		30 (34.1%)	32 (36.0%)	32 (47.8%)	37 (54.4%)	39 (44.3%)	33 (45.2%)
計		88 (100.0%)	89 (100.0%)	67 (100.0%)	68 (100.0%)	88 (100.0%)	73 (100.0%)

3-3-2 JJのほめの返答

「同級生」とのほめの場面では表1単独での返答が53.7%と一番多い。内訳では単独の肯定「感謝・喜び」が29.6%と一番多く、次に多いのが表2複合の返答「肯定→肯定」で13%である。表3返答の下位分類使用総数では「感謝・喜び」の使用が40.9%ともっとも多く、次の「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」15.9%の2倍以上の使用が見られた。「友達」の場面では複合での返答が50.9%で単独より若干多い。複合の内訳では「肯

定→肯定」が 15.8%、「回避→肯定」と「肯定→回避」がともに 14%と次に多かった。単独の返答では「賛同の発言」、「控えめな発言」が 12.3%を占め、「同級生」で一番多かった「感謝・喜び」は 8.8%である。返答の下位分類使用総数では肯定の「感謝・喜び」と「賛同の発言」が 22.5%と一番多く、次に「控えめな同意」と「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」が 14.6%見られた。「友達」では多様な返答スタイルが使われているが、「同級生」では単独での肯定や「感謝・喜び」の使用が多数を占めるなど、返答のスタイルにある程決まった傾向が見られる。

3-3-3 CL の返答

CLS の「同級生」では複合の割合が 64.9%と多く、内訳では「回避→肯定」が 48.6%と一番多い。次に割合が多かったのは、単独での「感謝・喜び」で 21.6%である。返答の下位分類使用総数では「感謝・喜び」が 38.8%で、次に「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」が 34.3%である。「友達」では複合の返答が 51.2%と多く、内訳では「回避→肯定」が 24.4%と一番多く、「回避→回避」と単独での返答「賛同の発言」がともに 14.6%である。返答の下位分類使用総数では「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」が 27.9%ともっとも多く、次に「賛同の発言」が 16.2%である。

CLL の「同級生」では単独の返答が 55%と一番多く、内訳では「感謝・喜び」が 31.7%を占め、次に複合の「回避→肯定」が 18.3%である。返答の下位分類使用総数では「感謝・喜び」が 46.6%と最も多く、次が「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」で 21.6%である。「友達」では単独の返答が 56.9%と多く、内訳では「感謝・喜び」と複合の「回避→肯定」がともに 15.7%である。返答の下位分類使用総数では「感謝・喜び」と「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」がともに 21.9%を占めている。

CL も JJ と同じように「同級生」の返答ではある程度決まった傾向が見られるが、単独の「感謝・喜び」の使用が多くを占める JJ の返答に対して、CLS は複合の返答「回避→肯定」がもっとも多く使われている。CLL は JJ と同じ単独の「感謝・喜び」の使用が一番多いが、次に「回避→肯定」も多く使われている。

表 3 の返答総数では JJ と CL とともに「感謝・喜び」の使用が一番多い。JJ と CLL が 2 番目に多い「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」より「感謝・喜び」のほうが 2 倍以上の割合を占めているのに対して、CLS では「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」の割合も多く、「感謝・喜び」とあまり差が見られなかった。

次に「友達」の場面を見ると、表 3 の返答総数で JJ が肯定の「感謝・喜び」と「賛同の発言」で 5 割近くを占めるのに対し、CLS は回避の「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」が一番多く、CLL では「感謝・喜び」と「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」が同じ割合を占めることが分かった。また、CL のみに見られた特徴として「貸与・提供の提案」が会話データで 3 例、DCT で 1 例見られた。

3-3-4 DCTにおけるCLの返答結果

CLに実施した紙面でのDCTの一部内容を例として以下に提示する。

例8 CL用DCT

ロールプレイと同じ場面で中国人の同級生や友達にほめられたら、どのように返答しますか。ほめられた時の感想と返答理由も書いてください。返答は中国語と日本語訳を書いてください。

1. 同級生：那个包，好可爱啊。 ※同級生は女性で、まだ話したことがありません。
あなた：

次にDCTに見られたCLの返答の下位分類使用数について結果を述べる。

「同級生」の場面ではCLLは41の返答が見られ、「感謝・喜び」が19(46.3%)が一番多く、次は「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」13(31.7%)であった。CLSは28の返答が見られ、「感謝・喜び」が16(57.1%)が一番多く、次は「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」8(28.6%)であった。

「友達」の場面ではCLLは38の返答が見られ、「賛同の発言」が16(42.1%)が一番多く、次は「情報・説明」9(23.7%)であった。CLSは26の返答が見られ、「賛同の発言」が9(34.6%)が一番多く、次は「ほめ内容の確認・驚き・とまどい」6(23.1%)、「情報・説明」5(19.2%)であった。

CLの中国語と日本語での返答を比較すると、「友達」の場面で大きな違いが見られた。中国語の結果では、「感謝・喜び」の割合が日本語の結果よりCLL21.9%→5.3%、CLS13.2%→3.8%と著しく低くなり、「賛同の発言」の割合がCLL15.1%→42%、CLS16.2%→34.6%と増えている。もう1つは日本語の会話データには1つも表れなかった「自慢」が、中国語DCTでは5例表れている。以下に「自慢」の説明と具体例を示す。

自慢：ほめを受け入れ、同意し、さらに自分のことを高く評価すること。

(金2012：151)

例9 自慢（本調査のDCTから抜粋）

友達：那个包，好可爱啊。

CLS5：是吧。我眼光还不错吧。（でしょう。私、目が高いよ。）

4. 考察

同等の関係である同性の相手から肯定的な自己評価を持っている所持物をほめられた場合の返答について、JJとCLで比較し、以下の特徴が明らかになった。

まず、疎の関係にあたるはじめて話す「同級生」へのほめの応答の特徴では、JJとCLLは単独での「感謝・喜び」、CLSは「回避→肯定」の複合が一番多く使われており、

同等の疎の関係では決まった返答が使われやすいことが分かった。

次に親の関係である「友達」の返答では CL にのみ会話、DCT で「貸与・提供の提案」、DCT で「自慢」の使用が見られた。

「貸与・提供の提案」は会話データで CLL3、CLL7、CLS16 の 3 例、DCT では CLL6 の 1 例が見られた。会話データの 3 例は最初のかばんに対するほめのやりとりの後で、かばんの説明や買った店の話になり、再度 JJ がほめを行った際に「貸与・提供の提案」が行われている。CLL3 では JJ3 の「あーかわいい、私もこういうの欲しいなあ。」というほめに対し、CLL3 が「あ、そうなの？あー、この前ね、なんか私の誕生日の時、JJ3 からすーごく、なんか、きれいな、その一、ワンピース、もらったから、はい、もし、これ好き、好きだったら、これ使ってよ、使っていいよ。」と返答している。CLL7 では JJ1 の「いいね。」というほめに対し、CLL7 が「うふふ<笑い>、欲しい？」と質問し、JJ1 が「ちょっと欲しい。」と答えている。CLS16 では、JJ14 が「いいなー、私も買い物に行きたいよ。」と羨望と自分の願望を表明すると、CLS16 が「あ、ほんと？一緒に行きます？私は今日このかばん、私の服、よく似合わないんです。もし・・・、この後は、JJ14 は、デートする、つもりの時は、これ、貸しますよ。」と買い物へ誘った後、改めて貸与の申し出を行っている。DCT では「那个包，好可爱啊。（かばんかわいい）」というほめに対し、CLL6 は「喜欢的话，送给你。（好きだったら、あげる）」と返答している。

CL からの「貸与・提供の提案」を受け、JJ3 は「えっ、いいの？使っていいの？」、JJ14 は「[驚いたように]ほんと？」と驚きを表していた。そのことから、JJ のほめの発言には「貸与・提供」を期待した意図はなかったことがうかがえる。JJ1 は CLL7 からの「欲しい？」という提案に「ちょっと欲しい」と答えているが、「今度（国へ）帰った時に買ってきますよ。」という発言に「あ、まじで？やった！」と驚きと喜びを表していた。

では、なぜこういったやりとりが発生したのであろうか。CL のインタビューでの返答理由を見ると、CLL3 は「中国では、自分だったら、自然なことで、欲しかったらあげるのは普通」、CLL7 は「友人に関しては、本当にかわいいと思うかという確認や、好きなものはシェアしたいという気持ちがあるから、今度買ってくるという話になった」、CLS16 は「友達だから、いいものは積極的にシェアしたいので、本当は自分もかばんを気に入っているが、『今日の服装に似合わないから、貸しますよ』といった」というものだった。一概には言えないが、中国においては親しい友人と積極的にいいと思うものをシェアしたいという考えがあり、ほめられたものを「貸与、提供すること」は、それほど珍しくないようである。

それに対し、JJ 同士会話では「貸与・提供の提案」の返答は 1 つも見られず、金 (2012) の調査でも日本語母語話者の使用は見られなかった。CL の返答を聞いた JJ が一様に驚いていたことから、かばんのほめに対して「貸与・提供の提案」は JJ には馴染みが薄いように思われる。例えば、ほめ手が家族や姉妹といった身内であれば、普段から服

やかぼんの貸し借りが行われる可能性が高く、相手から明確な「貸与・提供」の依頼がなくとも、所持物のほめのみで「貸与・提供の提案」が行われる可能性はあるかもしれない。しかし、日本での友人同士の場合では、かぼんや服の貸し借りはあまり頻繁に行われていないように思われる。そのため、相手から明確な「貸与・提供」の依頼や意思表示がないと、「貸与・提供の提案」はしにくいのではないだろうか。

こういった日中での親しい間における物の貸与・提供に対する考え方の違いが、「所持物のほめ」→「ほめられた物の貸与・提供の提案」→「ほめ手の驚き」といった会話の流れを生み出したと考えられる。また、返答の直前で行われた JJ3 の「私もこういうのが欲しいなー」というほめや JJ14 の「いいなー、私も買い物行きたいよ」という発言も、CL に JJ からの「貸与・提供」の意図を感じさせ、「貸与・提供の提案」の返答を誘発させてしまった可能性も高いと考えられる。

もう一つの CL の特徴的な返答として、「自慢」がある。金 (2012) は「自慢」を「相手の笑いを誘い、その場の雰囲気と和ませる機能を持っている」反面、「表現自体は相手に失礼になる恐れがある」と指摘しており、CL も失礼になる恐れがある「自慢」は JJ との会話では控えた可能性が高い。これに対して「貸与・提供の提案」は、ほめ手に対して「失礼」になる恐れが少なく、むしろ親しい関係であることを示せると CL が考え、JJ との会話で使用した可能性が高い。

本調査の結果では、親しい関係である「友達」の場面で、母国での規範意識の影響から、JJ には使用が見られない「貸与・提供の提案」が CLS、CLL ともに見られた。それは親しい関係での「親しさの示し方」において、母語の語用論的転移がおこったからだと考えられる。DCT に見られた「自慢」も「親しさの示し方」に関わる返答だが、相手に失礼になる可能性が高いものは、転移がおこりにくいと考えられる。

5. おわりに

本調査では、これまで日本語教育であまり取り上げられなかった友達とのほめの場面で、CL の返答に母語の語用論的転移が生じることが分かった。今回の結果を受け、ほめの場面でおこりうるミス・コミュニケーションを防ぎ、スムーズにやりとりを行う上で、形式的な表現の指導だけでなく、自分たちがほめや返答にどういった意識を持っているのかも考えられるような授業の必要性を強く感じ、これを提言としたい。

参考文献

- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房
- 小玉安恵 (1996) 「談話インタビューにおけるほめの機能—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から— (1)」 『日本語学』 5月号, pp.59-67. 明治書院
- 寺尾留美 (1996) 「ほめ言葉への返答スタイル」 『日本語学』 5月号, pp.81-88. 明治書院
- 戸森優季 (2013) 「中国人日本語学習者のほめに対する返答研究」 埼玉大学大学院文化科学研究科日本・アジア研究専攻修士学位論文

平田真美(1999)「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学センター紀要』16, pp.38-47. 横浜国立大学

丸山明代(1996)「男と女とほめー大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析ー」『日本語学』5月号, pp.68-80. 明治書院

横田淳子(1985)「ほめられたときの返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58, pp.203-217. 日本語教育学会

凌宇(2015)「接触場面における中国人日本語学習者のほめと返答スタイルー日本語母語話者との比較を通してー」『言語文化と日本語教育』48/49(合併号), pp.106-109. お茶の水女子大学日本言語文化学会

付記

本稿は埼玉大学大学院文化科学研究科に提出した修士学位論文(戸森優季、2013)に加筆・修正をくわえたものである。

(早稲田大学日本語教育研究センター非常勤インストラクター)

「観光日本語」とは何か

— 海外の日本語教育機関の調査と国内の現状をもとに —

田代 由貴

【キーワード】

観光日本語、日本語教育、インドネシアの観光日本語、やさしい日本語ツーリズム

【要旨】

本稿では、「観光日本語」について国内外の教育機関等を調査した。「観光日本語」は、観光業のための「観光日本語」と観光客のための「観光日本語」の2つがある。観光業のための「観光日本語」は、一般的な日本語学習の初級を学習していなくても学習が可能である。レベルによってグループ化でき、a.決まったフレーズで対応する、b.一般的な日本語教育の初級レベルの文法+α、c.日本国内で観光業に就業する外国人母語スタッフの日本語とd.観光客の日本語の4つである。a~cは、明確な目的による学習が最も重要と思われ、それによって、どの業務がどのレベルでできるか目安とし、実務に携われるようになると思われる。また、国内外、レベルにかかわらず、敬語の運用、その地域独特の語彙や職種の語彙の使用、マナーなどの学習も「観光日本語」の範囲に入っており、観光業のための「観光日本語」の特徴であるといえる。観光客の「観光日本語」は観光客が日本語を使おうとしたときのみ有効と考えるものと、やさしい日本語を日本観光のひとつの観光資源としてとらえていると考えられるものがある。

1. はじめに

筆者は、青年海外協力隊員（以下、協力隊員）として、佐久間（2005）の観光に関する日本語教育の事例にも取り上げられているインドネシアの観光専門学校へ派遣されたことがある。観光専門学校では、将来観光関係の仕事をしたいと思う人々に対する日本語教育が行われており、「観光日本語」と呼ばれていた。ここでの日本語教育に携わる中で、当該機関で規定の日本語学習を終了した学生が、観光業においてすぐに実践できる日本語が習得できているとは感じられず、日本語が必要な観光業の業務に従事できるかは、考えられなかった。そこで、何を達成すれば「観光日本語」を習得したと言えるのかを考えていくうち、どのようなものを「観光日本語」としているのか、という疑問を持った。「観光日本語」とは何か。

本稿では、「観光日本語」、また「観光日本語」教育とは、どのようなものを明らか

にしていきたい。また、これまで、海外が中心とされてきた「観光日本語」教育が現在、観光立国を政策に掲げる日本国内でも必要となりつつあることについての現状を考察する。

2. 研究の目的

『日本語教育事典』佐久間（2005）に観光に関係のある日本語教育（観光日本語）として取りあげられているが、目的、レベルなど詳しいことは、記述されていない。長期にわたる実践があるとされるインドネシアでも、関係者の間には、現在でも、共通認識がないと考えられる。そこで、「観光日本語」、「観光日本語」教育とは何かを明らかにしたい。

また、これまでは、海外で先行していた「観光日本語」教育だが、観光立国を政策に掲げる日本国内でも、今後「観光日本語」教育が実践されつつある現状について考察する。

3. 先行研究

佐野（2009）は、ホテル観光業等のサービス業従事者として、目的別日本語の中の職業目的の日本語教育の一例としてあげているが、詳細な記述はない。また、『日本語教育事典』佐久間（2005）による「観光に関する日本語教育」として取り上げられ、一般的な特徴としては、

- ①ガイドのため、ホテル業務のためといった日本語学習の目的が明確なこと、
- ②ときには非常に高度なコミュニケーション能力まで要求されること、
- ③学習時間が十分ではないケースが多いこと、
- ④日本語教育の実践や研究がさかんになった今日でも、さまざまな理由から「観光日本語」についての本格的な研究は皆無に近い、

があげられている。「観光日本語」教育を部分的に述べたものであり、定義や現状に触れたものではあるが、レベルなど詳しい記述はなく、一般的に共通の認識ができるものではない。また、『日本語教育事典』佐久間（2005）では、2005年に書かれたものであり、有効な日本語学習が特に切望される分野との記述があるが、それ以降も佐久間（2015）において、同様の記述があることから、本格的な研究はないと言える。

文献としては、いくつかの国や地域の「観光日本語」とされる事例がある。それらは、事例研究として、とりあげていく。

4. 調査方法

いくつかの国や地域の「観光日本語」教育を取り上げている研究や教科書を事例文献として調査・分析を行う。先行研究で「観光日本語」の一般的な特徴とされている①学習目的②レベル③時間④研究の蓄積の4つの特徴について分析する。佐久間（2005）に、「観光に関する日本語教育」として取り上げられているインドネシアの事例について、

どのようなものか、インドネシアの観光専門学校のカリキュラム、教材研究、協力隊員報告書、ボランティア要望調査票などをもとに明らかにする。また、日本国内の状況について書かれた文献で国内の状況を調査・分析する。

5. 調査結果

5-1 国外事例研究のまとめ

先行研究での「観光日本語」の一般的な特徴をもとに、各国や地域の実践を調査した結果、

- ・ガイド、ホテル業務ととらえている事例が多い、
 - ・初級前半～初級終了レベル+α（敬語の運用、地域独自の語彙、言語能力以外）、
 - ・時間が不十分という認識はみられない、
 - ・教材は場面シラバスが多い、
 - ・4技能の「話す」に重点→非丁寧な話し言葉を聞きとる力が必要とされる、
- などが分かった。

表1 「観光日本語」教育が行われている国や地域

国・地域	① 目的	② レベル	③ 時間	④ 研究	その他	文献	年
モンゴル	ガイドの仕事に実用的に役立つもの	N4+ 敬語の運用 ガイドのマナー サービス力	300 +1	×	レベルの高い日本語は必要とされていない 場面シラバス	ゾブター	2010
マレーシア	—	N4+ 顧客満足の担い手とは、 一生懸命な姿、ホスピタリティ、 社会文化能力、 問題解決能力	—	—	言語能力の一般化は難しい	高島	2011
マダガスカル	日本語によるガイド技能を習得する	N4+ 必要と思われる文型についての 運用力をつけ、 初級では、取り上げられない 語彙、表現を習得すること	300 +	—	相手を不快にさせない ような日本語による表現 方法を身につける	ラクト マナナ	2006
キューバ	日本語観光ガイドの養成	N4+ 敬語の運用	300 +60	中南米では×	敬語の運用に比重。 アンケート調査 トラブル処理等の対処 するコミュニケーション 能力が重要	ゴンザ レス	2013

¹ 300 としたものは、初級終了、+は初級終了に+〇時間の意。

グアム	日本人観光客とコミュニケーションできること 客の要求にこたえられること	初級前半終了+	100+		文化的な要素	岩田	2009
台湾	立場によって求められるものが違う 個人旅行者のニーズ	一概に必要な文型を論じられない	—	×	「学校」「従業員」「観光客」 大学：観光学科の一部 4技能：話すことに偏り 丁寧・非丁寧 大半が場面シラバス	王	1998
中国	日本語ガイド養成	少なくとも N4+	—	—	会話：場面シラバス	曲	1999
カンボジア	従業員がホテルで使う日本語の習得(敬語)	少なくとも N4+ ホテルの語彙接遇用語	300+	—	丁寧・非丁寧 場面シラバス	大石	2003
	カンボジアで日本人観光客にガイドをすること	少なくとも N4+ 語彙数 2000 語強	300+100	—	語彙数 2000 語強	鬼	2006
タイ	シラバス作成の目的のみ	初級前半 N5+ ガイドの仕事内容 観光地の知識 (日本語専攻向け)	150+28	—	観光学科 場面シラバス	長町他	2006
タイ	—	ホテルのランクによって違う	—	有	既存の観光ガイド用日本語シラバスやカリキュラムが実際の現場のニーズや現状を取り入れる視点が欠けている	中井他	2011

5-2 インドネシアの事例

インドネシアの観光専門学校の教科書、シラバス、同校の日本語教育を支援していた国際協力機構の資料等を中心に分析した結果、

- ・制限時間が重視されている、
 - ・初級前半レベル（学習項目：動詞の活用などに違いあり）、
 - ・語彙（初級レベルではない独自のものも多数採用）、
 - ・丁寧語を取り入れる、
 - ・産出に重点（理解文型が少ない）、
 - ・非丁寧な観光客の言葉が理解できるか、
 - ・学校教育の問題点と共通の問題、
 - ・蓄積・継続性がない、
 - ・「観光日本語」教育への関係機関、関係者の認識のずれがある、
- ことなどが明らかになった。

表2 インドネシア観光専門学校「観光日本語」

	①目的	②レベル	③時間	④研究	その他	年
シラバス 教科書	シラバスでの目標は、一般的教科書は、観光で使う文型を取り入れている	初級前半程度 動詞の活用 学校間で違い有	30~90 制限された 時間あり	実践有	・時間制限 ・語彙 ・丁寧語 ・翻訳練習が多い→実践とあっているか。 ・日本語の産出に重点→非丁寧が理解できるか。 ローマ字表記	2000 頃~現在
報告書	学習者が熱心ではないなど、学校教育との共通点あり 目的がない サービス業に就くものがないなど	学校側からレベルをあげる等の要望はない 初級を終了しない 全く話せないまま卒業する	第2外国語で週1の授業 少ない 制限がある	教科書の 検証など なされていない	学校教育の問題点と同じ問題。	2003~ 2010
要望調査票	学校によって違う	N4~中上級	記載なし	—	接客マナー、日本人の習慣、文化紹介を含む	2007~ 2015

5-3 国内の事例研究

近年日本国内でも実践例が報告されるようになった国内での「観光日本語」の現状は、観光業のための「観光日本語」と観光客のための「観光日本語」の大きく2つにわかれる。

観光業のための「観光日本語」では、留学生が観光業に就く事が目的とされ、

- ・聞く力、話す力が同等に重要なこと、
- ・敬語の運用の学習、
- ・文法的には正しいが、失礼になる日本語の学習、
- ・相対的なレベルより特定の配属部署の業務ができるかできないかが重要なこと、
- ・同僚、取引先に使う日本語も必要なこと、

などが分かった。

観光客のための「観光日本語」のレベルは、

- ・やさしい日本語レベルと想定されているが、高等教育機関での学習者の割合も多く、

一概にやさしい日本語レベルとは言えない、
 ・「観光日本語」の学習としては、その範囲を超えている、
 などが明らかになった。

表3 日本の事例

国・地域	①目的	②レベル	③時間	④研究	その他	文献	年
日本	留学生が観光業に就くため	N2 以上、聞く力と話す力 相対的なレベルより、特定の業務ができるかできないか	不明	なし なし	敬語の運用 文法的に正しいが接客では失礼になる表現など 学習として可能なものと経験が必要なもの ビジネスの日本語も必要	鳥居（2012）	2012
	観光客	やさしい日本語レベルと想定されているが、実情は不明	不明			やさしい日本語ツアー HP など	2016

6. まとめ

①目的②レベル③時間④研究の他、観光客数、その他の項目をまとめた。

①の目的に関しては、海外の事例でも日本の事例でも、ガイド養成やホテルへの就職などという目的があるものが多かった。しかし、インドネシアの事例で見たように、明確な目的が見いだせず学校教育と同様の問題もあった。また、ガイドやホテルの業務に就くという目的は、明確であるが、実務ではその中の何の業務ができるのかまで明確にすることが、習得するうえで、重要だと考えられた。明確な目的は、「観光日本語」を実践するうえで、ここが定まらなければ、何をするのかを決められず、最も重要な項目といえる。台湾、日本国内では、ガイド、ホテル業務に就くだけでなく、観光客の「観光日本語」も含まれている。

②のレベルは、一般的な日本語学習の後に「観光日本語」を学習するものと、学習歴がなくても「観光日本語」を学習するものがあったが、どちらも可能といえる。しかし、自由な会話などが可能かどうかなどの差が出ると考えられる。また、全く学習歴がなく学習するインドネシアの事例でも、学校によって学習項目が違うなど必要な文法項目が

精査されているわけではない。学習歴がある、ない、どちらの場合も、敬語の運用や地域、職業独自の語彙を学習していることから、「観光日本語」の特徴の一つといえる。

日本国内での就業と考えられる場合は、日本語能力試験 N2 レベルが求められている。相対的なレベルより、ある業務ができるかできないかが重要で、既習事項での文法的に正しいが失礼になる日本語について学習する必要があるとされ、その場でのふさわしい日本語が求められている。また、ホテル業務でも多岐にわたり、学習すれば対応が可能になるものと、経験を積まなければならないものがあると考えられ、どのような範囲を学習の範囲とし対応するかを考える必要がある。業務内容や勤務地により高いレベルが必要と考えられる。

③時間に関して、海外の事例では、少なくとも 100 時間～300 時間の一般的な日本語学習の初級を学習した後、「観光日本語」を始めるといったものが多かった。「一般的な日本語学習の初級+α」が多いといえる。つまり、「観光日本語」を学習するには、初級をある程度学習しなければならないと認識されているといえる。これに対し、インドネシアの事例からは、全く学習した経験がなくても、「観光日本語」を学習することはできると考えられる。これは、決められた学習時間が最も優先され、その中で有効な学習を模索した結果ということが出来る。日本国内の「観光日本語」に関しては、日本語能力試験 N2 レベル以上としている。旧日本語能力試験 2 級の 600 時間程度、中級終了程度を基準とするのであれば、中級レベルでは、観光業務に就く上でまだ不足があると考えられているといえる。インドネシアでは、時間の制限があったが、シラバス、教材内容を考えると不十分というわけではない。その他の国や地域でも、不十分という認識は、見られなかった。

④の研究は少ないといえる。インドネシアの事例では、研究がないことや蓄積がないということが、関係者や関係機関の間の認識のずれを生み、または、全く何の認識も持たずに「観光日本語」という言葉を利用することになり、実践が混乱する原因ではないか、と考えられるところもあった。

7. 結論

「観光日本語」は、観光業のための「観光日本語」と観光客のための「観光日本語」に大きく 2 つに分けられ、概念の違うものである。

観光業の「観光日本語」は、これまで主に海外で「観光日本語」として実践されてきたが、近年、国内状況の変化により、日本でも実践されるようになってきた。学習のレベルによって、以下のようにグループ化することができる。

- a. 決まったフレーズで対応する日本語
- b. 一般的な日本語教育の初級レベルの文法+α の日本語

- c. 日本国内で観光業に就業する外国人母語スタッフの日本語
- d. 観光客の日本語

また、特徴として、難易度が高くても低くても、敬語の運用、その地域独特の語彙や職種の語彙の使用、マナーなどの学習も「観光日本語」の範囲に入っており、学習する必要があると思われる。

「観光客のための日本語」は、台湾など訪日客が多い国や地域では認識されていたが、日本国内の事例としても、やさしい日本語ツーリズムのような日本側の取り組みとともに、実践されつつある。

観光客が日本語を使おうとしたときのみ有効と考えるものと、やさしい日本語を日本観光のひとつの観光資源としてとらえていると考えられるものがある。

8. おわりに

世界の各地で実践が行われ、観光に関係する様々な要素を含む日本語教育として使われてきたが、確立した分野でもなく、明確に学習範囲が決まっているわけでもなく、共通の認識があるというわけでもなかった。インドネシアの観光専門学校の事例から、研究の少なさが実践にも影響を与えているのではないかということも明らかになった。「観光日本語」は、学習により習得できる部分が確実にあり、効率的な学習が期待できる部分であると思われる。それに比べ、経験を積むことでしか習得できないような部分も多くあると考えられる。そのような部分をどうやって学んでいくのかなど、「観光日本語」そのものを見ていく必要もあるだろう。また、海外が中心であった「観光日本語」が日本国内でも、必要とされつつある現状について、「外国人労働者受け入れ」や「外国人観光客の誘致」などの側面からの現場についての調査などを今後の課題としたい。

参考文献

- 庵功雄（2013）「『やさしい日本語』とは何か」『『やさしい日本語』は何を目指すか多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 岩田一成（2013）「文法から見た『やさしい日本語』」『『やさしい日本語』は何を目指すか多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 岩田祐佳（2009）「 Guam 大学における観光日本語コースカリキュラムデザイン」『世界の日本語教育論集』19, pp.125-139. 国際交流基金
- 尾崎明人（2014）「グローバル化時代のグローバル人材育成と日本語教育」『『グローバル人材』再考 言語と教育から日本の国際化を考える』くろしお出版
- 王敏東（1998）「台湾における“観光日本語”関係の教材について」『日本語教育研究』36, pp.93-104. 財団法人言語文化研究所
- 大石安慧（2003）『ホテルの日本語』NPO 法人 ASIA 言語文化交流協会
- 鬼一三（2006）『日本語ガイドの基礎知識 100』一三三日本語教室

木曾敦子・Adi Hendraningrum・Andaprasetyo Ery (2002) 『かんこうにほんご』 I. II.

III マカッサル観光専門学校

曲永紅 (1999) 『日本語ガイドのテクニックと会話』 西安外国語音像教材出版社

ゴンザレス (2013) 「キューバ人日本語ガイドのための「観光日本語」ーハバナ大学外国部
学部用シラバスの提案ー」『創価大学大学院紀要』 35, pp.265-283. 創価大学大学院

佐久間勝彦 (2006) 「海外に学ぶ日本語教育ー日本語学習の多様性ー」『日本語教育の新たな
文脈』 pp.33-64. アルク

佐久間勝彦 (2015) 「海外日本語教育研究の課題」『海外日本語研究』 1, pp.2-24. 海外日本
語教育学会

佐野ひろみ (2009) 「目的別日本語教育再考」『専門日本語』 11, pp.9-14. 専門日本語教育
学会

ゾブダー,ゾルザヤー(2010) 「モンゴル国立科学技術大学における「観光日本語」シラバス」
『日本言語文化研究会論集』 6, pp.211-235. 日本言語文化研究会

高島美江 (2011) 「非日本語母語話者観光ガイドに求められる日本語能力と評価の側面ーツ
アーオペレーター社員への調査からー」『桜美林言語教育論叢』 7, pp.33-45. 桜美林大
学言語教育研究所

陳芳 (2011) 『実用出境導遊日語教程』 南京大学出版社

鳥居加菜 (2012) 「観光業における外国語母語スタッフのための日本語教材開発について」
『Studies in Language science』 2, pp.159-180. 立命館大学大学院言語教育情報研究
科

独立行政法人国際交流基金『海外日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査』

独立行政法人国際交流基金『海外日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査』
(CD-ROM)

独立行政法人国際交流基金『海外日本語教育の現状 2012 年度日本語教育機関調査』

長町聡子・中村照・松原昭・山川紀子 (2006) 「ラチャパットの観光学科のための観光日本
語用シラバス作成について」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』
3, pp.107-114. 国際交流基金

中井雅也・千葉真人 (2011) 「タイで求められるホテルビジネス用日本語ー日本人観光客へ
のアンケート調査に基づいてー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育
紀要』 8, pp.105-114. 国際交流基金

日本語教育学会編・水谷修ほか編集 (2005) 『日本語教育事典』 大修館書店

松本剛次 (2013) 「インドネシアの中等教育改革がめざす「能力 (コンピテンシー)」とその
育成」『日本語教育』 158, pp.97-109. 日本語教育学会

山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法ー話す能力を高めるためにー』 ひ
つじ書房

ラクトマナナ,アンビニンツア, スルフニアイナ (2006) 「マダガスカル人日本語ガイドのた
めの「観光日本語」シラバス作成」『日本言語文化研究会論集』 2, pp.277-293. 日本言

語文化研究会

エフィルシアナ・山下美紀・森本由佳子 (2006) 「インドネシアの専門高校観光部門観光サービス業務専攻用日本語教科書「インドネシアへようこそ」作成報告」『国際交流基金日本語教育紀要』2, pp.121-126. 国際交流基金

The Japan Foundation, Jakarta 『インドネシアへようこそ』1,2 (2005) 国際交流基金

Dyah Triandri Indah Kusurnarini Lukia Zuraida Megumi Kojiri(2002) 『観光日本語』I・II バリ高等観光専門学校

参考資料

バリヌサドゥア高等観光専門学校シラバス

マカッサル観光専門学校シラバス

独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊報告書

独立行政法人国際協力機構ボランティア要望調査票 H18 年度春

独立行政法人国際協力機構ボランティア要望調査票 H26 年度春

独立行政法人国際協力機構ボランティア要望調査票 H26 年度春

参考 website

独立行政法人国際協力機構 (2016 年 6 月 10 日閲覧) <http://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/>

一般社団法人日本旅行協会 (2016 年 10 月 6 日閲覧) <http://www.jata-net.or.jp/>

独立行政法人国際交流基金 (2016 年 10 月 6 日閲覧) <http://www.jpf.go.jp/j/>

首相官邸 HP 「日本再興戦略改訂 2015ー未来への投資・生産性革命」改訂戦略

(2017 年 11 月 27 日閲覧) <http://www.kantei.go.jp.cache.yimg.jp/index.html>

弘前大学人文学部社会言語学研究室 (2017 年 11 月 6 日閲覧)

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>

やさしい日本語 (2017 年 11 月 6 日閲覧) <http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi/>

やさしい日本語ツーリズム研究会 (2017 年 11 月 27 日閲覧)

<http://yasashii-nihongo-tourism.jp/>

(埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程)

無意志自動詞の可能表現に関する研究

— 中国人日本語学習者の使用状況を中心に —

梁 笑彤

【キーワード】

無意志自動詞、可能表現、中国人日本語学習者、使用状況

【要旨】

本稿では、アンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、中国人日本語学習者（以下、CL）が可能の意味を表す無意志自動詞の基本形を使わない傾向がある、ということを明らかにした。そして、日本語教育現場においては、CLが無意志自動詞の基本形を使わない理由を重視しておらず、これは、多くの教材において関連する説明が少ないことから明らかである。

また、日本語と中国語の可能表現の違いについて、当該文で述べている出来事が実現するか否かが焦点化されている場合、CLは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対し、日本語母語話者（以下、JN）は動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しないということを、当該の出来事が「習慣性であるか」あるいは「1回性であるか」という条件から論じた。

最後に、CLの無意志自動詞の不適切な使用を改善するための日本語の教え方を、日本語教師および教科書の2つの観点から提案した。

1. はじめに

日本語では、「荷物が届く」の「届く」などの無意志自動詞には、可能形がない。しかし、日本語教育においては、「無意志自動詞には可能形がない」ことに関しては、あまり重視されていないので、CLは可能形があると考え、頻繁に以下の(1c)(1d)のような誤用を引き起こす。

(1) a. 鍵がないので、ドアが開かない。

b. 鍵がないので、ドアが開けられない。

c. 鍵がないので、ドアが*開けない。

d. 鍵がないので、ドアが*開くことができない。

(1) は、「ドア」が最後に、どのような状態になっているかを表現している。日本語では、自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる。(1) では動作主が意志的に「開ける」という行為を試みるわけだが、しかし、「開く」という結果が実現しないと捉えている。一方、CLは「開く」は無意志自動詞で、可能形がないということを意識しておらず、該当文では可能性を論じているのだと考え、(1c) (1d) のように、形式上は対応する「*開ける」、「*開くことができる」と可能形に変換してしまう。

そこで、本稿では、CLを対象に、アンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、無意志自動詞の可能表現の習得状況を明らかにした上で、CLは無意志自動詞をどのように捉えているのかについて、考察する。

2. 無意志自動詞の可能表現についての先行研究

無意志自動詞の基本形で可能の事態を表す現象については、既に多くの先行研究がある(小林 1996、青木 1997、張 1998、張 2001、都築 2001、于 2006、呂 2007、楠本 2009 など)。

2-1 日中無意志自動詞の可能表現の異同に関する研究

まず、張(1998: 88)は「中国語の場合は、可能補語の補語成分が動作によって引き起こされる状態変化を表すが、日本語の場合は、有対自動詞がそれを表すことが多い。言い換えれば、つまり有対自動詞は日本語の結果可能表現の主な表現形式であるということである。」と述べている。

次に、張(2001: 104)によれば、中国語の自動詞には可能のニュアンスは含まれていない、という。そのために、自動詞の後にも可能の形態素を挿入して使うので、日本語との間にずれが生じてくるとしている。一方、日本語の場合は、可能の形態素の使用は意志性の有無に関係し、無意志自動詞や意志自動詞の非意志用法として用いられた場合は、可能の形態素を挿入する必要がないし、挿入すると非文法的になるとしている。

最後に、于(2006: 146)は、「中国語は動作・行為重視で、その動作・行為の実現の可否に重点を置くものなので、意志性の有無や可能のカテゴリーを問わず、すべてマーカーで明示して表現する。一方、日本語は動作・行為と結果の両方に関わるので、意志性のある動作・行為についてはマーカーで明示して表現し、意志性のない動作・行為については自動詞でその結果を示すのである。」としている。

本研究では新たな視点として、無意志自動詞には可能の意味がないこと、単なる基本形で動作の実現の可否を表すことができることを検討する。

2-2 CLの使用状況に関する研究

小林(1996: 47-52)は、68人の日本語学習者(そのうちCLは25人)を対象とし、「部屋に入りたいが、ドアが開かない」という場面を設定し、「開く」「開ける」「開けられる」のような動詞の使用状況について考察している。また、CLと比較するため、JN(15人)の傾向も調査した。

その結果、JNは自動詞のアク系の使用が一番多かったのに対し、CLはアケル系およびアケラレル系の選択が好まれる、ということが分かった(「あかない」「あいた」=アク系、「あけられない」「あけられた」=アケラレル系、「あけた」「あけない」=アケル系とする)。

しかし本稿では、小林(1996)の分析には、以下のような問題点があると考えられる。

①設問として「開く」しか取り上げていないので、分析として十全とは言えない。

小林(1996: 48)の調査で使用された設問では、

- ・「開くか開かないか」が焦点化されている
- ・動作主が想定される
- ・1回性である

ということが前提となっており、そもそも可能の形態素が入りやすい要素がそろっている上での調査である。しかし、それでは十全な調査ができないと思われる。そこで本稿では、

- ・当該の出来事が実現するかしらないかが焦点化されていない(予備調査問題1~4)
- ・動作主が想定しにくい(アンケート調査問題14)
- ・1回性でない(予備調査問題1~3)

といった状況を設定して、可能の形態素を挿入する要因が弱い条件における設問で、調査・分析を行う。そのことによって、CLの無意志自動詞と可能の形態素の関係を十全に調査することができるだろう。この点に、本稿の独自性がある。

②アケルの場合、可能形と受身形が同じであることから、被験者がどちらのつもりで選択しているか分からない。

小林(1996: 54)では、『アケル』の場合、可能形と受身形が同じであることから、被験者がどちらのつもりで選択しているかわからない。」と述べられている。しかし、本稿の調査結果を見ると、CLは母語干渉によって可能形として使っているのだと推測される。このことについては、さらに研究する必要があると考えられる。

③小林(1996)は相対自動詞による結果・状態の表現という視点から「自動詞の基本形」、「自動詞に対応する他動詞の基本形」、「対応する他動詞の可能形」という3つの選択肢を設定した。本稿では、無意志自動詞の可能表現という視点から、あらゆる可能形式を選択肢として設定し、CLの使用状況を明らかにする。

3. 予備調査

本調査の前に、予備調査を行った。予備調査は、CLが自然現象や習慣性の出来事を表現するのに、可能の形態素を挿入しない、という前提を検証することを目的とする。

予備調査は、日本国内において、日本語能力試験 N1 に合格している CL に協力してもらった。全部で 5 人である。調査の結果、5 人の答えが一致した。予備調査の内容と回答は以下のようである。

1. 日：雪が消えた。
中：雪化了。
2. 日：日が暮れた。
中：天黑了。
3. 日：髪が伸びた。
中：头发长了。
4. 日：歯がぼろっと抜けた。
中：牙掉了。

1~4 のいずれの回答にも、可能の形態素が含まれていない。調査対象者 5 人全員の回答が一致したので、CLは JN と同じく、自然現象や習慣性の出来事については可能の形態素を挿入しない、ということを以下の議論での前提とする。なお、予備調査の問題は本調査には含めなかった。

4. アンケート調査

4-1 アンケート調査の概要

4-1-1 調査対象者

本調査は日本国内において、日本語能力試験 N1 に合格している CL に協力してもらった。全部で 86 人である。

また、CL と比較するため、同時に 4 人の JN にもアンケートに回答してもらった。

4-1-2 調査内容

アンケートでは 20 問の設問を用意した。そのうちの 10 問 (問題 1、3、5、7、9、11、13、15、17、19) はダミーで (無意志自動詞とは無関係の設問)、あとの 10 問が無意志自動詞に関するものである。

無意志自動詞に関する設問は以下のようである。

[I 類無意志自動詞]

2、鍵がないので、ドアが_____。

- a. 開かない b. 開けない c. 開けられない d. 開くことができない

4、この窓がどうしても_____。

- a.閉まらない b.閉まれない c.閉められない d.閉まることができない

6、(受け取る側) 交通事故が発生したので、午前中に荷物が_____。

- a.届かない b.届けない c.届けられない d.届くことができない

10、あの車は何回も事故に遭ったので、もう_____。

- a.直らない b.直れない c.直せない d.直ることができない

14、水と油はあまりよく_____。

- a.混ざらない b.混ざれない c.混ぜられない d.混ぜることができない

18、このカバンに全ての荷物が_____。

- a.^{はい}入らない b.^{はい}入れない c.^{はい}入れられない d.^{はい}入ることができない

20、この薬で毎日目を洗えば、一週間で角膜炎が_____。

- a.治る b.治れる c.治すことができる d.治ることができる

[Ⅱ類無意志自動詞]

8、卵はナイフの背で_____。

- a.割れる b.割られる c.割ることができる d.割れることができる

12、虫歯で歯が_____。

- a.抜ける b.抜かれる c.抜くことができる d.抜けることができる

16、この(汚れ)全然_____。

- a.落ちない b.落ちられない c.落とすことができない d.落ちることができない

4-2 アンケート調査のデータ統計

(表1) 設問2

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.開かない	9	10%	●
b.開けない	53	62%	
c.開けられない	23	27%	●
d.開くことができない	44	51%	

(内訳：「a」のみ：5人、「b」のみ：30人、「c」のみ：10人、「d」のみ：16人、
 「a、c」：2人、「a、d」：2人、「b、c」：3人、「b、d」：18人、「c、d」：6人、
 「b、c、d」：2人)

(表2) 設問4

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.閉まらない	14	16%	●
b.閉まれない	30	35%	
c.閉められない	40	47%	●
d.閉まることができない	38	44%	

(内訳：「a」のみ：9人、「b」のみ：12人、「c」のみ：13人、「d」のみ：4人、
 「a、c」：2人、「a、d」：2人、「b、c」：2人、「b、d」：9人、「c、d」：15人、
 「a、c、d」：1人、「b、c、d」：7人)

(表3) 設問6

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.届かない	10	12%	●
b.届けない	63	73%	
c.届けられない	15	17%	
d.届くことができない	36	42%	

(内訳: 「a」のみ: 5人、「b」のみ: 33人、「c」のみ: 11人、「d」のみ: 6人、
 「a、b」: 2人、「a、c」: 1人、「a、d」: 1人、「b、c」: 1人、「b、d」: 27人、
 「c、d」: 2人)

(表4) 設問10

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.直らない	11	13%	●
b.直れない	52	60%	
c.直せない	26	30%	●
d.直ることができない	42	49%	

(内訳: 「a」のみ: 7人、「b」のみ: 30人、「c」のみ: 10人、「d」のみ: 8人、
 「a、b」: 1人、「a、c」: 1人、「a、d」: 2人、「b、c」: 1人、「b、d」: 18人、
 「c、d」: 12人、「b、c、d」: 2人)

(表 5) 設問 14

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.混ざらない	15	17%	●
b.混ざれない	44	51%	
c.混ぜられない	25	29%	
d.混ぜることができない	36	42%	

(内訳：「a」のみ：10人、「b」のみ：25人、「c」のみ：9人、「d」のみ：8人、
 「a、c」：1人、「a、b」：1人、「a、c」：1人、「a、d」：2人、「b、c」：1人、
 「b、d」：13人、「c、d」：9人、「b、c、d」：4人)

(表 6) 設問 18

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.入らない	16	19%	●
b.入れない	54	63%	
c.入れられない	35	41%	
d.入ることができない	51	59%	

(内訳：「a」のみ：11人、「b」のみ：14人、「c」のみ：19人、「d」のみ：11人、
 「b、c」：1人、「b、d」：30人、「c、d」：6人、
 「a、b、c」：5人、「b、c、d」：4人)

(表7) 設問20

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.治る	13	15%	●
b.治れる	52	60%	
c.治すことができる	43	50%	
d.治ることができる	37	43%	

(内訳：「a」のみ：3人、「b」のみ：19人、「c」のみ：18人、「d」のみ：11人、
 「a、b」：2人、「a、c」：3人、「a、d」：2人、「b、c」：11人、「b、d」：12人、
 「c、d」：5人、「a、b、c」：1人、「a、b、d」：2人、「b、c、d」：5人)

(表8) 設問8

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a.割れる	25	29%	●
b.割られる	45	52%	
c.割ることができる	35	41%	●
d.割れることができる	31	36%	

(内訳：「a」のみ：17人、「b」のみ：19人、「c」のみ：9人、「d」のみ：9人、
 「a、c」：6人、「a、d」：1人、「b、c」：8人、「b、d」：10人、「c、d」：4人、
 「a、b、c」：1人、「b、c、d」：7人)

(表 9) 設問 12

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	
a. 抜ける	18	21%	●
b. 抜けられる	66	77%	
c. 抜くことができる	10	12%	
d. 抜けることができる	5	6%	

(内訳：「a」のみ：14人、「b」のみ：56人、「c」のみ：3人、「d」のみ：1人、
「a、b」：2人、「a、c」：2人、「b、c」：4人、「b、d」：3人、「b、c、d」：1人)

(表 10) 設問 16

選択肢	C L		J Nの選択
	回答数	回答率	選択
a. 落ちない	20	23%	●
b. 落ちられない	53	62%	
c. 落とすことができない	30	35%	●
d. 落ちることができない	37	43%	

(内訳：「a」のみ：15人、「b」のみ：23人、「c」のみ：18人、「d」のみ：15人、
「a、b」：1人、「a、d」：3人、「b、c」：10人、「b、d」：18人、「c、d」：1人、
「a、b、c」：1人)

4-3 結果分析

まず、I類無意志自動詞に関する回答（問題 2、4、6、10、14、18、20）を見ると、無意志自動詞の基本形を使用することで出来事の実現の可否を表すことができることを理解していないC Lが少なくなかった。また、C Lは無意志自動詞には可能形がないということを理解しておらず、無意志自動詞を使う場合は、その（形式上は対応する、誤用としての）可能形の使用率が高かった。

次に、II類無意志自動詞に関する回答（問題 8、16）を見ると、C Lによる無意志自

動詞の基本形の使用率は、Ⅰ類無意志自動詞のそれよりも高く、全てのⅡ類無意志自動詞で20%を超えたが、JNの使用率と比べるとまだ低かった。

(問題12については、多くのCLが可能の意味を読み取れず、受身の意味と解釈したため、結果分析からは除外した。)

5. インタビュー調査

5-1 調査対象者と内容

アンケート調査の後、アンケートに回答したうちの6人にインタビューを行った。インタビューは、すべて1人ずつ対面で行い、使用言語は中国語であった。

インタビューの質問は以下の3つである。

- ①無意志自動詞があるということを知っていたか？
- ②各設問において、なぜ動詞の基本形を選んだ／選ばなかったのか？
- ③日本語を学習したとき、無意志自動詞には可能形がなく、基本形そのままの出来事の実現の可否を表すことができる、ということを教えられたことがあるか？

5-2 調査結果

①アンケート調査では、被調査者6人が無意志自動詞があるということを理解していなかった。

②CLが無意志自動詞の基本形を選択した場合、特に選択理由があるわけではなく自身の語感で選択した場合と、周りのJNが話したことを聞き覚えていた場合があった。基本形を選択しなかった場合、その理由は、出来事の実現の可否を表現する場合は、基本形ではなく可能形を使用すべきであると判断したためであった。

インタビューの結果から、基本形を選択したCLは、無意志自動詞には可能形がないということを一一般論として理解しているわけではなく、そのため、ある設問で基本形を選択しても、別の設問では(誤用としての)可能形を頻繁に選択し得ることが分かった。

③インタビューを受けた6人全員が、無意志自動詞について教えられたことがないと答えた(日本語教師が教えたとしても、教師もCLもそれを重要ポイントとして捉えていなかったため、CLには教えられた記憶がない、という可能性もある)。

第4章と第5章の調査結果から次のことが明らかになった。

- a. CLは無意志自動詞そのままの使用率が低い。
- b. CLは無意志自動詞には可能形がないということを理解しておらず、(形式上は対応する、誤用としての)可能形を頻繁に使用する。
- c. 当該の無意志自動詞に対応する他動詞の可能形を使ってしまうCLもいる。

6. 無意志自動詞の基本形の非用の理由

第5章で見たとおり、CLは無意志自動詞をそのまま使う割合が低い。このことを以

下では、無意志自動詞の「非用」と呼ぶ。

6-1 可能形を選択する理由

6-1-1 母語の負の転移

以下の例を見てみよう。

(2) 日：田中さんは水泳ができる。 (3) 日：この薬で角膜炎が治る。

中：田中 ^{田中さん} 会 ^{できる} 游泳。

中：用 ^{使う} 这个 ^{この} 药 ^{できる} 能 ^{治れる} 治好 ^{角膜炎} 角膜炎。

JNは、(2) と (3) の事態を分けて認識している。すなわち、(2) の「水泳」の例では「水泳ができる」と言えるが、(3) の「角膜炎」の例では「角膜炎が治れる」と言わない。一方、CLは、(2) も (3) も同じように認識しているので、どちらの例にも中国語の「^{できる}能」、「^{できる}会」などの(可能を表す)形態素を挿入する。それが原因で、CLは頻繁に(3)「角膜炎が治れる」のような誤用を引き起こすのだと考えられる。

6-1-2 日本語教育での教え方

日本語教師は可能表現と可能形を教えるとき、動詞をどのように変換するかということばかりに重点を置き、「無意志自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる」ということには、ほとんど重点を置いていない。まったく言及しない日本語教師もいると考えられる。

さらに、多くの教材においては「無意志自動詞」に関する説明が不十分である。本稿では、日本語教育の現場で頻繁に使用されている9冊の日本語教科書¹(教師用指導書と文法説明書)を対象として、無意志自動詞に関する記述があるかどうかを調べてみたが、どの教科書でも有意志自動詞は詳しく説明され、要点もよくまとめられているのに対し、(出来事の実現の可否を表現する)無意志自動詞に関する記述は少なく、教科書の最後に載っている文法を整理した一覧にも含まれていなかった。

このような状況が、CLが無意志自動詞とその可能表現を認識しにくい要因になっていると考えられる。

¹ 『新版中日交流標準日本語初級(下)』(2005)人民教育出版社、『できる日本語・初級』(2013)アルク、『できる日本語教え方ガイド&イラストデータ CD-ROM 初級』(2011)アルク、『できる日本語・初中級』(2013)アルク、『できる日本語教え方ガイド&イラストデータ CD-ROM 初中級』(2011)アルク、『できる日本語・中級』(2013)アルク、『みんなの日本語初級Ⅰ』(2016)スリーエーネットワーク、『みんなの日本語初級Ⅱ』(2016)スリーエーネットワーク、『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳・文法解説中国語版』(2014)スリーエーネットワーク

6-2 他動詞を選択する理由

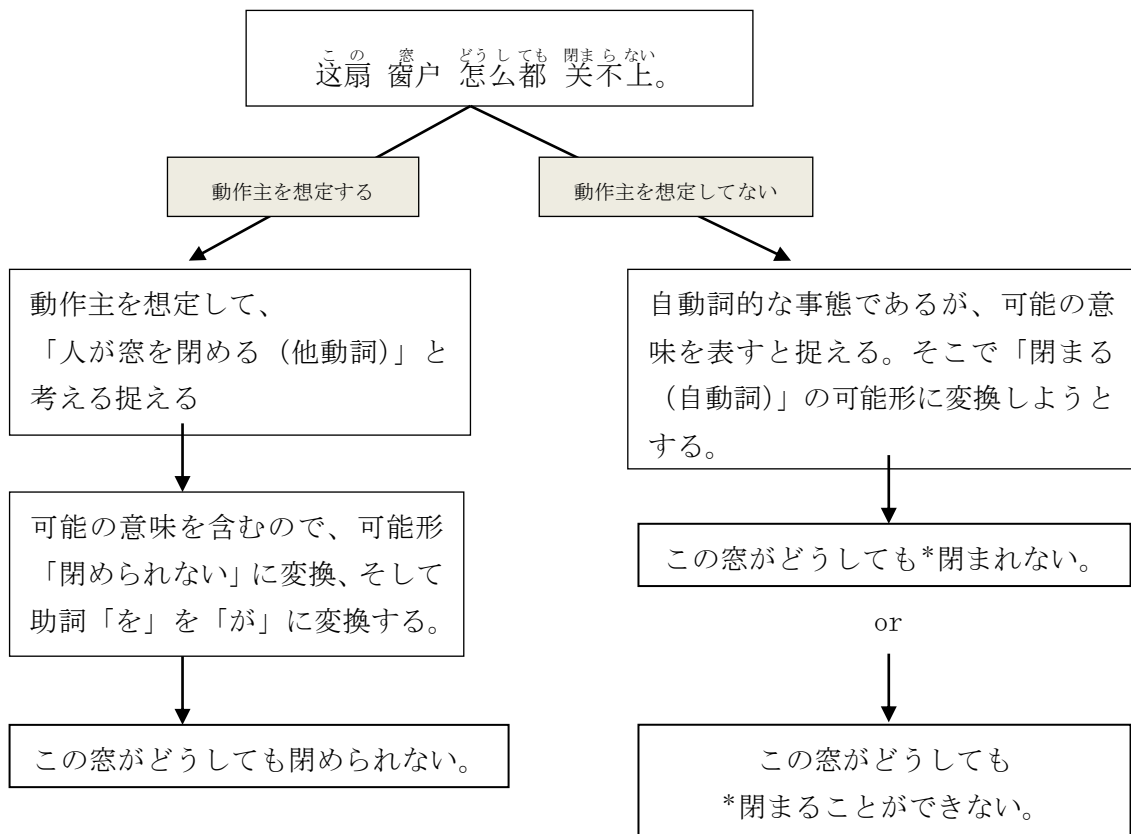
ここで、アンケート調査の問題4を例として分析したい。

この窓がどうしても閉まらない。

JNは「この窓が閉まらない」を言うとき、動作主を想定していない。

一方、CLは「この窓がどうしても閉まらない」という意味を表したいとき、動作主を想定してしまう。そして、動作主が存在するので、他動詞「閉める」を使うのが自然である、と考えてしまう。

上記のようなCLの思考過程を、図1のように分析した。



(図1) 設問4におけるCLの思考過程

7. 日中可能表現の使う場面の違い

当該の出来事が実現するかしないかが焦点化されている場合、CLは可能の形態素を挿入しやすいのに対して、JNは動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しない。ここに日中可能表現の大きな違いが存在する。

それを前提として、本章では、当該の出来事が「習慣性であるか」あるいは「1回性

であるか」という条件から、この問題について考える。

まず、JNもCLも習慣性の出来事、あるいは自然現象を表すとき、自動詞（中国語では動詞の基本形で、可能の形態素が入らない）で表現するのが一般的である。

以下の例を見てみよう。

(4) 日：雪が消えた。

中：雪化了。

(5) 日：日が暮れた。

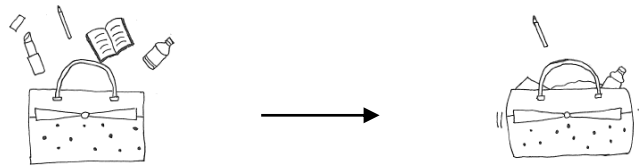
中：天黑了。

次に、「1回性の出来事」である。CLは「1回性で出来事」を表現するとき、頻繁に可能／不可能という捉え方をする。

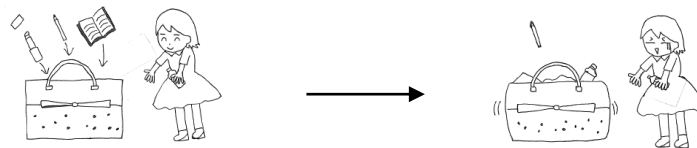
1回性の出来事には、動作主が想定される場合と、動作主が想定しにくい場合の2つがある。

まずは、動作主が想定される例を見てみよう。

(6) このカバンに荷物が入らない。



(図2) JNの視点



(図3) CLの視点

1回性の出来事を表現するとき、JNは図2のように、動作主が対象（荷物）に力を加えて変化を生じさせ、「入らない」という結果になった場合でも、動作主を考慮せず、「荷物が入らない」という結果状態のみを強調し、自動詞で表す。

一方、CLは必ず動作主を想定する。(6)の「荷物が入らない」場面では、動作主の動作に視点を置き、一生懸命荷物を入れようとしたが無理であったための結果と捉えて、可能形および否定形で表すのが一般的である（中国語は自他同形）。

しかし、すべての場合において動作主が想定できるわけではなく、想定しにくい（あるいは動作主が存在しない）場合もある。次に、動作主が想定しにくい、かつ1回性の出来事の例を見てみよう。

(7) これ以上、人口が増えない。

(7) では、動作主が誰であることを明確にしにくいので、CLは特に動作主を想定しない。しかし、「人口が増えない」は習慣的なことではなく、1回性の出来事であり、必ずある原因または条件（少子化、高齢化の進行など）によって「人口が増えない」という結果になるのである。このとき、CLは「ある原因が増加を不可能とする」と捉え、可能の形態素を挿入しようとする。

注目すべき点は、肯定表現より否定表現の方が「可能形の形態素」を挿入しやすい、ということである。以下の例を見てみよう。

(8) 隣の人が「鍵ならありますよ。ここに落ちていました。これですか」と鍵を見せました。

「ええ、そうです。」(ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる)

「ああ、1) あけた。

2) あいた。

3) あけられた。」

小林 (1996 : 48)

(8) の出来事は1回性であり、動作主がいても肯定表現であるので、CLにとって可能の形態素が入りにくい。では、否定表現の例を見てみよう。

(9) 日 : (ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる)

「あれっ!? あかない!!」

中 : (ガチャガチャ と を 鍵 入れる 鍵穴
咔嚓咔嚓 的 把 钥匙 插进 钥匙孔)

「咦!? 打不开!!」

(9) の日本語の文を中国語に翻訳すると、「V不C」のように可能の形態素が入る。

このように、肯定表現より否定表現の方が、可能の形態素が入りやすいということが分かる。

以上の議論から、出来事が実現するかしないかが焦点化されている場合、CLは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対して、JNは、動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しない、ということが分かる。これは日本語と中国語において可能表現を扱う際の大きな違いである。すなわち、CLは、習慣性の出来事を表現するときは、JNと同じく、動作主も原因も考慮することなく、動詞の基本形を使用する。一方、1回性の出来事を表現するときは、JNが変化後の結果状態に視点をおいて自動詞で表現するのに対して、CLは、動作主を想定できるか否かにかかわらず、可能／不可能という観点から捉え、可能の形態素を挿入する傾向にある。

このことを表にまとめると、以下のようになる。

(表 11) 自動詞の基本形を使う条件の比較

条件		日	中
出来事が習慣性である		○	○
出来事が 1 回性である	動作主あり	○	×
	動作主なし	○	×

(○=自動詞の基本形を使う、×=可能の形態素を挿入する)

(可能の形態素の入りやすさ：肯定<否定)

8. 無意志自動詞の習得

まず、日本語教師が可能表現を教える際は、無意志自動詞の可能表現にも重点を置くべきである。また、日本語と中国語の可能表現の異同も教えるべきである。そうすることにより、CLは、無意志自動詞の可能表現をより良く理解し、より効果的に習得できるであろう。

次に、アンケート調査とインタビュー調査の結果から、JNが発する日本語も、CLに影響を及ぼすことが示された。教科書の内容を把握するだけでは獲得できない自然な日本語の言い回しに接触することも学習に役立つと思われる。自然な日本語を授業に取り入れる一案として、日本語のニュースやビデオなどをCLに見せる、ロールプレイや交際会話の時間を設けるなどして、CLの無意志自動詞の運用能力を育て、少しずつ母語の影響による誤用を除いていくべきである。

さらに、教科書には「無意志自動詞の基本形で出来事の実現の可否を表すことができる」および「無意志自動詞は可能形にできない」という2つの文法に関する説明を導入すべきである。また、第7章で述べた日本語と中国語における可能表現の使用場面の違いを教科書に含むと、CLはより良く学習できると考える。

9. おわりに

本稿はアンケート調査とインタビュー調査を行うことにより、CLは可能の意味を表す際には無意志自動詞の基本形を使わないことを明らかにした。

そして、日本語教育現場においては、CLが無意志自動詞の基本形を使わない理由を重要視しておらず、これは、多くの教材において関連する説明が少ないことから明らかである。

また、日本語と中国語の可能表現の違いについてみると、当該文で述べている出来事が実現するか否かが焦点化されている場合、CLは可能の形態素を挿入する傾向があるのに対し、JNは動作主が想定されない限りは可能の形態素を挿入しないことを、「習慣性であるか」あるいは「1回性であるか」という条件から論じた。

最後に、CLの無意志自動詞の不適切な使用を改善するための日本語の教え方を、日

本語教師および教科書の2つの観点から提案した。

本稿では、アンケートに動作主が想定しにくい状況、および1回性でない状況などを想定した設問を用意したが、さらに設問の種類や数を増やし、分析を深めていくことを今後の課題としたい。

参考文献

- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』スリーエーネットワーク
- 青木ひろみ (1997) 「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『神田外語大学大学院紀要言語学研究』3, pp.11-26. 神田外語大学
- 于康 (2006) 「日本語と中国語」『講座・日本語教育学』6, pp.141-155.
- 楠本徹也 (2009) 「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』79, pp.65-85. 東京外国語大学
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」『文藝言語研究・言語篇』29, pp.41-55. 筑波大学
- 都築順子 (2001) 「『可能の意味を含む自動詞』に関する一考察」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.85-90. 日本語教育学会
- 呂雷寧 (2007) 「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言語と文化』8, pp.187-200. 名古屋大学

(埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程)

断り表現に関する日韓対照研究の動向

河 正一・徐 明煥

【キーワード】

ポライトネス、インポライトネス、利益の対立と衝突、フェイス侵害行為、異文化理解、意味公式、ストラテジー、負荷の度合い

【要旨】

本稿では、断り表現に関する日韓対照研究の動向を概観し、調査方法及び調査内容について研究方法の妥当性や問題点の検証などを試みた。断り表現のアプローチには、断り表現に用いられる言語形式の相違点に焦点を当てた言語形式的アプローチ、断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた社会言語学的アプローチ、そして第二言語習得における学習者の中間言語語用論に焦点を当てた言語教育学的アプローチが見られた。

しかし、従来の研究では、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為として捉えていたため、ポライトな言語ストラテジーとしての断り表現に偏っている。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスであり、今後インポライトネスの観点を取り入れた研究が必要不可欠であろう。

1. はじめに

科学の進歩は、世界のグローバル化に拍車をかけ、人々の異文化間交流の機会をより一層、増加させるに違いない。しかし、そこには当然ながら互いの異なる言語トラブルや異文化摩擦の危険性が潜んでいる。円滑かつ効果的なコミュニケーションの遂行は、互いの異文化に対する理解が求められるが、異文化理解への糸口となるのが言語文化における社会言語学的観点からの研究であろう。

こうした時代の変化と要求に伴って、2000年代に入ってから異文化理解に対する言語教育が注目を浴びるようになり、日韓対照研究では、多岐にわたった社会言語学観点からの研究が行われるようになってきた。

そこで、本稿では、様々な社会言語学的観点からの研究のうち、断り表現を中心に日韓対照研究の研究動向を概観し、検討を行うことを目的とする。

以下、2節は、断り表現に関する日韓対照研究のアプローチを概観する。3節では、調査方法と調査内容に分けて詳細に分類し、研究方法の妥当性や問題点などについて、論じていく。

2. 断り表現に関する日韓対照研究のアプローチ

これまでの断り表現に対するアプローチの特徴を分類すると、以下の通りとなる。

- (Ⅰ) 言語形式的アプローチ
- (Ⅱ) 社会言語学的アプローチ
 - (1) 負担の度合いとしてのアプローチ
 - (2) 意味公式もしくはストラテジーとしてのアプローチ
 - (3) ポライトネスとしてのアプローチ
 - (4) 非言語行動としてのアプローチ
- (Ⅲ) 言語教育学的アプローチ

(Ⅰ) 言語形式的アプローチは、言語形式に重きを置いた研究方法として、断り表現に用いられる言語形式の相違点に注目した研究である(任炫樹 2002a、2004b、2012、元智恩 2003 など)。例えば、元智恩(2003)は、断わる場面で用いられた文末表現「ノダ」文と韓国語の文末表現「것 같다」(geos gata)文がどのような印象をもたれるかについてそれらのつかない文と比較分析している。

断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた(Ⅱ)社会言語学的アプローチは、調査目的によって4つのアプローチが見られる。(1)負担の度合いとしてのアプローチは、断り表現における負担の度合いに焦点を当て、依頼や勧誘の内容がどの程度、依頼や勧誘される人にとって、負担となるかという観点からの研究である(李先敏 1999、2001、이현정 2011a、2011b、2012 など)。이현정(2011b)は、「車を貸してほしいと頼んだ場合」と「お金を貸してほしいと頼んだ場合」の2つの場面を取り上げ、各場面を「個人的に立てた原則および心理的な理由で断られる場合」と「回りの状況および自分の能力不足で断られる場合」に分けて、断る立場ではなく断られた際に感じる不愉快さを分析している。

(2)意味公式²もしくはストラテジーとしてのアプローチは、良好な対人関係を維持するために用いられる断り表現の言語ストラテジーに焦点を置いた研究である(元智恩 2002、2005、洪珉杓 2007、임영철・김윤희 2010、김정현 2013 など)。임영철・김윤희(2010)は、大学の先生から「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな」という依頼をされたらどのように断るかについて、比較している。

¹ 分析に用いた論文は、主に論文検索サイトの CiNii (日本) と RISS (韓国) の論文を対象とした。文献の書き方として、一般的に日本は、苗字のみを、韓国ではフルネームを用いるため、日本人研究者は苗字のみを、韓国人研究者はフルネームで示す。そして、韓国で刊行された論文には、刊行年度に下線を引いて区別する。

² 意味公式とは、人がものを断るときに用いる言葉を、その意味内容によって分類したものである(生駒・志村 1993: 44)。

(3) ポライトネスとしてのアプローチは、断り表現を相手のフェイス³に対する配慮として捉えた研究である(任炫樹 2004a、権英秀 2007 など)。任炫樹(2004a)は、「食事の勧誘」「翻訳の進め」「英会話カセット・テープ購入の勧誘」の状況に対し、断り談話においてポジティブ・ポライトネス・ストラテジーがどのように現れるかを「量的・質的差異」「ウチ・ソト・ヨソによる差異」「男女差」という観点から分析している。

(4) 非言語行動としてのアプローチは、ことばそのものによる伝達ではなく、視線、表情、身振りなどといった非言語行動に焦点を当てた研究である(任炫樹 2002b、2005、김정현 2014 など)。任炫樹(2002b)によれば、日本人は断るとき、アイ・コンタクトを気にするが、韓国人はあまり気にせず、相手を見て意見を表明する頻度の割合が高い。そして、話がより深刻化すればするほど相手の顔を見ることをできるだけ避けようとする傾向があるという仮説は、日本人には当てはまるものの韓国人には必ずしも当てはまらないという。

(Ⅲ) 言語教育学的アプローチでは、第二言語習得における学習者の中間言語語用論⁴に焦点を当てた研究である(目黒 1994、1998、藤森 1995、金潤淑 2005、申媛善 2013、吉田 2014 など)。目黒(1994)は、中国人留学生 11 名、台湾人留学生 10 名、韓国人留学生 13 名を対象に、日本人が多く使う断り方の「謙遜型」の会話のテープを聞かせ、理解度と対応の仕方を比較する実験を行い、日本人と比較して韓国人は「謙遜型」への理解度が低く、中国人は依頼をやめるのが早いと指摘している。

3. 研究動向の分析

本節では、主に調査方法と調査内容に分けて研究方法の妥当性や問題点などについて、論じていく。研究動向の分析に用いた論文は合計 28 本であり、それらの調査方法を分類すると、以下の通りとなる。

³ Brown & Levinson (1987) は、社会の成員は皆ある種の基本的な欲求、すなわちネガティブ・フェイス (negative face) とポジティブ・フェイス (positive face) を持っているとする。ネガティブ・フェイスとは自分の行動が他人によって干渉されてほしくないという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは自分が大切にしている物や価値や行動などを他人によって理解されたり高く評価されたいという欲求である。この二つのフェイスを脅かすような行動がフェイス侵害行為 (Face-threatening Acts) であり、フェイス侵害行為の度合いが高くなればなるほど、よりポライトなストラテジーが必要になると捉えている。つまり、Brown & Levinson (1987) は協調の原理に違反する行為者の動機づけをフェイス侵害行為の軽減というポライトネス理論から求めている。

⁴ 中間言語語用論とは、非母語話者である第二言語や外国語の学習者 (特に、区別する必要がない限りまとめて「第二言語学習者」と呼ばれる) が、実際にことばが使われる文脈の中で伝達、理解される意図や意味に関する第二言語の知識をどのように使用するのか、またそうした知識をどのように習得していくのかを解明する分野だと言える (清水 2009 : iv)。

①教材分析

論文	調査対象	調査内容
아오키사야카 (2012)	日本語教材 48 冊 韓国語教材 32 冊	「依頼」および「勧誘」に対する断り表現の分析

②意識調査

論文	調査対象	調査内容
李先敏 (1999)	日本人 50 名 韓国人 50 名 大学生	時間的・能力的に可能だが、やりたくないとき、すなわち「英文の手紙を翻訳してほしい」と「本を貸してほしい」という断りの分析
李先敏 (2001)		時間的・能力的に不可能なので、引き受けるのがはばかれる場面、すなわち「英文の手紙を翻訳してほしい」と「本を貸してほしい」という断りの分析
元智恩 (2003)	日本人 95 名 韓国人 106 名 大学生・大学院生	「学生 A が教官からの引っ越しの手伝いの依頼を断わる」と「学生 A が友人からの引っ越しの手伝いを断わる」という 2 つの断る場面で用いられた文末表現の比較分析
이현정 (2011a)	日本人 46 名 韓国人 48 名	「プライバシー」「好み・趣向」「時間・スケジュール」「お金・物」の 4 つの素材と相手との利益関係の分析
이현정 (2011b)	日本人 230 名 韓国人 235 名	「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」断られた際に感じる不愉快さの度合いの分析

③談話完成テスト

論文	調査対象	調査内容
元智恩 (2002) 録音による	日本人 95 名 韓国人 106 名	「指導教官に研究室の引越しの手伝いを頼まれたが、時間的・能力的に手伝うことが可能であるが、なんとなくやりたくないから断る場面」の分析
元智恩 (2005) 録音による	日本人 95 名 韓国人 106 名 大学生・大学院生	「親しい指導教官および親しくない指導教官から研究室の引越しの手伝いを頼まれたが、断わる場面」と「親しい友人及び親しくない友人から引越しの手伝いを頼まれたが、断わる場面」の分析
임영철・김윤희 (2010)	日本人 99 名 韓国人 99 名 大学生・大学院生	「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があつたら案内係りをお願いできるかな」という場面における断りの分析

④意識調査＋談話完成テスト

論文	調査対象	調査内容
目黒 (1994) その上、インタビュー調査	日本人 38 名 韓国人留学生 13 名	「日曜日の留学生パーティーでスピーチを依頼された場合」における「謙遜型」の会話のテープを聞かせ、理解度と対応の仕方の分析
目黒 (1998)	日本人 57 名 韓国人 62 名 韓国人学習者 89 名	「送別会の司会をするように頼まれた。引き受けるのは可能であるが、やりたくない場合」依頼者の上下や親疎による意識およびストラテジーの分析
洪珉杓 (2007)	日本人 263 名 韓国人 326 名 大学生	「考えておく」に対する意識調査および「依頼に対する断り場面 3 つ」「勧誘に対する断り場面 1 つ」「提案に対する断り場面 1 つ」における断りの分析
이현정 (2012)	日本人 230 名 韓国人 235 名	「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」2 つの依頼の負担の度合いとストラテジーの違いの分析

⑤ロールプレイ

論文	調査対象	調査内容
任炫樹 (2002a)	日本人 30 名 韓国人 30 名 大学生・大学院生	「食事の勧誘」「翻訳の進め」「英会話カセット・テープ購入の勧誘」における断り談話の開始に見られるあいづちマーカの分析
任炫樹 (2004a)		任炫樹 (2002a) の調査をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーという観点からの分析
任炫樹 (2004b)		任炫樹 (2002a) の調査を断り談話における理由表現マーカという観点からの分析
任炫樹 (2012)		任炫樹 (2002a) の調査を断り談話における不可表現マーカという観点からの分析
金潤淑 (2005) 電話による	日本人 5 件 韓国人学習者 7 件	「一週間後に開かれる、座談会に代わりに参加してほしい」に対する断りを<文末のモダリティ>と<発話機能>との二つの観点からの分析
権英秀 (2007) ロールプレイ＋ 談話完成テスト	日本人 50 名 韓国人 42 名 大学生	「家族である兄・姉と親しい先輩からの「物の買い出し」に対する「断り」表現を「意味公式」と「ポライトネスのフェイス」からの比較

⑥ テレビドラマ

論文	調査内容
任炫樹 (2002b)	勧誘・依頼を断る際に見られるアイ・コンタクトの分析
김정현 (2013)	提案、頼み、勧誘の場面で現れる断り表現を意味公式を用いて断り表現の類型および理由のマーカートの分析
김정현 (2014)	「勧誘」と「頼み」の場面において、断りへの負担によるアイ・コンタクトの現れ方の分析
金楨憲 (2014)	頼み、勧誘、提案の3つの場面で現れる「断り表現」の「理由表明」を私的・公的理由に分類し、さらに親疎関係における理由表明の分析
김정현 (2015)	間接的な拒絶表現を、faceを基準にして聴者中心の「婉曲表現」と話者中心の「婉曲表現」に分けて、各々の断り表現のストラテジーの分析
元智恩 (2016)	依頼に対する断わりと勧誘に対する断わりの特徴の分析

⑦ メール

論文	調査対象	調査内容
申媛善 (2013)	日本人 15 名 韓国人学習者 30 名	「日本人の同性、同世代の友達からコンサートに誘われたが、あなたはこのコンサートにあまり興味がなく、行きたくない場合、相手を怒らせたり傷つけないよう、断りのメールを書く」という調査
金楨憲・崔淑伊 (2012)	携帯メール 20 件 韓国人学習者	「今日、映画見に行かない？」という誘いに対する断りの意味公式の分析

3-1 調査方法

断り表現における調査方法は概ね上記の7つに分類することができる。調査方法の選択は、調査対象や調査目的、時間、費用などを総合的に考慮しなければならないため、最も適切な調査方法とは何かについて、一概には言えない。例えば、あらかじめ用意された質問項目に対する意識調査は、プリコード回答法⁵が採用されやすく、特定の状況における言語ストラテジーの調査では、談話完成テストやメールなどといった自由回答法が採用されやすい。また、より自然な会話の収集に焦点を置く場合は、ロールプレイが用いられやすいものの、時間的・費用的な問題点から比較的に手に入りやすいテレビドラマの調査方法が好まれる場合もある。

しかし、上記の調査方法には2つの問題点が見られる。1つは、調査対象が大学生・大学院生に偏っているという点である。このことは、10代後半から20代の大学生・大

⁵ プリコード回答法の「プリコード」とは、「予想される回答内容を回答選択肢としてあらかじめ用意しておき、それぞれの回答選択肢に符号(コード)をつけておく」という意味である。したがって、プリコード回答法では、質問文とともに示した回答選択肢の中から、該当する回答選択肢を選んでもらうことになる(辻・有馬 1987: 73)。

大学院生を調査対象にした研究は豊富であるが、他の年代・性別における研究は乏しいということの意味する。こうした傾向はおそらく研究者にとって時間的・費用的に最も効率よく調査ができる対象が大学生・大学院生であるためであろう。

もう1つは、調査目的に対する標本数の考慮である。例えば、이현정 (2011a) では、39個の質問項目について日本人46名（男24名、女22名）と韓国人48名（男24名、女24名）を対象に断り場面における意識調査を男女別および年代別（20～50代）に分けて調査している。しかし、この場合は質問項目が39個に比べて標本数が少ないため、精度が悪くなり、男女別および年代別での比較も意味がなくなってしまう。

では、どれ位の標本数が適切であろうか。辻・有馬（1987：121-124）は、意味のある推定をしようとする、少なくとも100程度の標本数が必要となり、このことはグループ別の分析においてもそれぞれのグループで少なくとも100以上が必要であるという。一方、佐竹（2001：82）は、調査量とサンプリングの決定は、過去の類似調査の例などを参考にして、自分なりに工夫した調査を繰り返すしかない。計量的な調査ではどんなに調査量を多くしても、どんなに厳密にサンプリングをしても、その結果が絶対的なものではないという。

標本数の決め方には⁶、信頼性係数や母分散など様々な要因が考慮されるが、質問項目と関連して偏りのない調査を行うためには質問項目の3~4倍以上の標本数が必要ではないかと思われる。すなわち、得られたデータを分析し、統計的に妥当な検証や解釈を行う量的アプローチでは、その根拠となるある程度の標本数を確保しなければならない。

3-2 調査内容

調査内容に焦点を当てて詳細にみると、依頼や勧誘、提案などの場面に対する断る側の分析が大半を占めている（元智恩 2002、洪珉杓 2007、임영철・김윤희 2010、申媛善 2013 など）。例えば、임영철・김윤희 (2010) は、日韓の大学生及び大学院生（日本人99名、韓国人99名）を対象に、大学の先生から「明日、留学生歓迎会があるんだけど、もし時間があったら案内係りをお願いできるかな」という依頼をされたらどのように断るかについて、調査を行っている。

その上、断り表現の焦点、すなわち「能力の有無」「対人関係」「負荷の度合い」の要因と関連した分析が多く見られる。例えば、李先敏（1999、2001）は、「時間的・能力的に可能だが、やりたくない場合」と「時間的・能力的に不可能なので、引き受けるのはばかれる場合」すなわち、断る側における「能力の有無」に焦点を当てている。また、元智恩（2003）は、「学生Aが教官からの引っ越しの手伝いの依頼を断わる」と「学生Aが友人からの引っ越しの手伝いを断わる」という2つの断る場面、すなわち、対人関係と関連した断り表現の調査に重きを置いている。そして、이현정 (2011a) は、断りの

⁶ 標本数の決め方については、辻・有馬（1987：122）における標本数を決定するための公式を参照されたい。

対象として「プライバシー」「好み・趣向」「時間・スケジュール」「お金・物」という4つの素材、すなわち負荷の度合いに注目して分析を行っている。さらに、이현정 (2012) では、断り表現における「能力の有無」「負荷の度合い」の要因が「対人関係」においてどのように現れるか、すなわちそれぞれの要因を考慮した調査が行われている。

一方、断られる側の観点からの分析は、断られた際に感じる不愉快さに焦点が置かれる。이현정 (2011b) は、「ドライブのために明日一日だけ車を貸してもらえないかと頼んだ場合」と「お金を貸してもらえないかと頼んだ場合」を心理的・原則の理由と状況および能力不足の理由で断られた際に感じる不愉快さの度合いに焦点を当てている⁷。

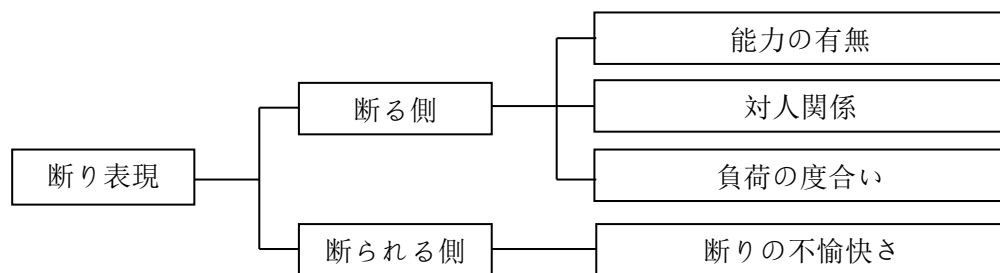


図1. 断り表現の調査内容の焦点

以上、調査内容に焦点を当てると、図1のようにまとめることができる。しかし、ここには2つの問題点が見られる。1つは、相互行為としての言語行為の分析では、話し手の言語ストラテジーだけでなく、語用論的效果として現れる聞き手の判断や印象も重要な研究対象となる。ところが、従来の研究はポライトネスにおける補償行為としての断り表現に焦点を当てた断る側の研究に偏っている。言語行為は自己と他者の相互行為として現れ、一回で済むわけではなくキャッチボールに喩えられるように互いの発話に基づき、さらに発話を重ねて進行していく行為である。ゆえに、断る側に焦点を当てた分析だけでなく、断られる側の解釈過程や断り表現に対する互いの反応など、談話参加者間の相互行為としてのアプローチが必要である。

もう1つは、上記の問題点とも相通じる。そもそも相互行為における断る言語行為とは何か、なぜ、相手の依頼を断るか、という断り表現の本質の観点があまり考慮されていない点である。「断る」ということは、相手の依頼や申し出に対して「できない」という意向を示す行為である。では、断る言語行為の動機付けは何であろうか。当然、断る理由には時間的・物理的にできない、面倒くさい、親しくない、興味がないからなど、様々な理由が考えられるが、その根底は互いの利益の対立と衝突として現れ、断る行為自体

⁷ しかし、「車を貸してほしい」という依頼が果たして両国の言語文化におけるフェイス侵害行為として現れる負荷の度合いが等しいだろうかという疑問が残る。つまり、同一の言語行為であっても、両言語文化における負担の度合いが必ずしも一致するとは限らないという点も考慮しなければならない。

は相手の依頼や申し出を受け入れないフェイス侵害行為である。ゆえに、断り表現には相手のフェイスに対する補償行為としての多様なストラテジーが用いられるわけであり、ほとんどの研究がこの捉え方から出発している。

ところが、こうした捉え方はあくまでもポライトネスの観点しか反映されてないと言わざるを得ない。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネス⁸の1つである。ということは、攻撃的かつ批判的、時には感情的な断り表現としてのインポライトネス・ストラテジー、例えば、相手の依頼に対して「なぜ、私が手伝わなければならない?」「私とは関係ない」なども考えられる。つまり、インポライトネスの観点から断り表現を捉えようとするアプローチが反映されてない。

インポライトネスとしての断り表現の軸は、対人関係におけるフェイス侵害行為としての負荷の度合いと利益の対立と衝突にある。利益はわれわれの言語行為の根源的な動機付けの1つであり⁹、談話参加者間にとって今後、利益になり得る依頼や申し出は多少、負担の度合いが多くても受け入れやすく、反対に負担の度合いが低くても今後利益になり得ない依頼や申し出は受け入れにくくなるであろう。すなわち、利益が断り表現に及ぼす影響は非常に大きい。

それにもかかわらず、利益の対立と衝突の度合い考慮した観点からの研究があまり見られない。勿論、李先敏（1999、2001）では、依頼に対するフェイス侵害行為としての負荷の度合いが考慮されているものの、その負荷の度合いのバランスや依頼の内容が被験者の利益と関連してどのように現れるかという観点が不足している。すなわち、断り表現における「対人関係」と「負荷の度合い」の要因のみならず、「利益」の要因がもたらす影響を含め、さらに総合的に考慮した分析が行われるべきであろう。

以上、調査内容に焦点を当てて詳細に論じた。従来の研究では、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為としての捉え方であり、このことは、ポライトな言語ストラテジーとしての断り表現の研究への偏りをもたらしたと言えよう。断り表現の本質は、互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスであり、今後インポライトネスの観点を取り入れた研究も必要であろう。

⁸ 河（2014）では、Brown & Levinson（1987）のフェイス概念を「相互行為における互いの行為者が打ち出した社会的価値としてのフェイス」として捉え直し、行為者の社会的価値の獲得としての働きかけが相互行為におけるフェイスの衝突を生み出すとする。ゆえに、ポライトネスは相互作用における合理的な利益獲得の言語行動である一方、インポライトネスは利益獲得の衝突として現れる言語行動であるという。本稿におけるポライトネスとインポライトネスの捉え方は、河（2014）に基づく。

⁹ 筆者は、相互作用における言語行為の選択と解釈に影響を及ぼす社会的要因、すなわち言語行為の動機づけとして「力関係」「社会的距離」「利益」を考えている。詳細は河（2013：67-69）を参照されたい。

4. 終わりに

日韓対照研究では、多岐にわたって社会言語学観点からの研究が行われてきた。そのうち、本稿では、断り表現を中心に研究動向を概観し、検討を行った。断り表現のアプローチにおいては、大きく分けて断り表現に用いられる言語形式の相違点に焦点を当てた言語形式的アプローチ、断り表現における社会的・文化的背景との関係に焦点を当てた社会言語学的アプローチ、第二言語習得における学習者の中間言語語用論に焦点を当てた言語教育学的アプローチが見られた。

従来の研究は、断り表現を相手に対するフェイス侵害行為への補償行為として捉えていたため、ポライトな言語ストラテジーとしての研究が一般的であった。しかし、見落としがちであるが、断り表現の本質は互いの利益の対立と衝突に動機づけられたフェイス侵害行為として現れるインポライトネスである。今後、こうした観点からの研究が必要となるであろう。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について－（語用論<特集>）」『日本語教育』79, pp.41-52. 日本語教育学会
- 任炫樹（2002a）「日韓断り談話における初出あいづちマーカ－」『ことばの科学』15, pp.37-64. 名古屋大学
- 任炫樹（2002b）「断りとアイ・コンタクト」『言葉と文化』3, pp.181-199. 名古屋大学
- 任炫樹（2004a）「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2, pp.27-43. 社会言語科学会
- 任炫樹（2004b）「日韓断り談話に見られる理由表現マーカ－ウチ・ソト・ヨソという観点から－」『日本語科学』15, pp.22-44. 国書刊行会
- 任炫樹（2012）「日韓断り談話における不可表現マーカ－対人関係調節の観点から－」『帝塚山学院大学研究論集. リベラルアーツ学部』47, pp.33-51. 帝塚山学院大学
- 元智恩（2002）「日本語と韓国語の断りの表現の構造－指導教官の依頼を断る場面を中心に－」『言語学論叢』21, pp.21-37. 筑波大学
- 元智恩（2003）「断わる場面における「ノダ」文と「것 같다」(geos gata)文について－それらのつかない文との印象比較－（<特集>コミュニケーションの社会言語科学）」『社会言語科学』6-1, pp.153-162. 社会言語科学会
- 佐竹秀雄（2001）「研究対象の量とサンプリング」『日本語学, 日本語の計量研究法』4月臨時増刊号 pp, 74-83. 明治書院
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論－第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育－』スリーエーネットワーク
- 辻新六・有馬昌宏（1987）『アンケート調査の方法－実践ノウハウとパソコン支援－』朝倉書店

- 河正一 (2013) 『フェイス侵害行為としてのインポライトネスの考察』 埼玉大学大学院文化科学研究科博士論文 9月
- 河正一 (2014) 「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」 『地域政策研究』 17-1, pp.93-116. 高崎経済大学地域政策学会
- 藤森弘子(1995) 「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」 『日本語教育』 87, pp.79-90. 日本語教育学会
- 洪珉杓 (2007) 「日韓両国人の言語行動の違い (9) —断りのストラテジーの日韓比較—」 『日本語学』 26-1, pp.80-90. 明治書院
- 目黒秋子 (1994) 「「謙遜型」断りのストラテジー」 『東北大学文学部日本語学科論集』 4, pp.99-110. 東北大学
- 吉田きち (2014) 「<言語とコミュニケーション>断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか—言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて—」 『コミュニケーション文化』 8, pp.44-55. 跡見学園女子大学
- 権英秀 (2007) 「「断り」表現における日・韓両言語—大学生の 'face' に焦点をおいて—」 『일어일문학』 36, pp. 23-38. 대한일어일문학회
- 김정현 (2013) 「한일 거절표현 구조 일고찰 — 의미공식을 중심으로 —」 『일본언어문화』 25, pp.143-162. 한국일본언어문화학회
- 김정현 (2014) 「거절발화시 「아이컨택」의 한일비교 — 「권유」와 「부탁」 장면에 초점을 맞추어 —」 『일본언어문화』 29, pp. 335-358. 한국일본언어 문화학회
- 金楨憲 (2014) 「断りににおける「理由表明」の韓日比較—「頼み」「勧誘」「提案」の場面に焦点をあてて—」 『일본근대학연구』 45, pp. 113-128, 한국일본근대학회
- 김정현 (2015) 「거절장면에서의 「완곡표현」 연구 — 한,일 TV 드라마를 중심으로 —」 『일본근대학연구』 49, pp. 123-138, 한국일본근대학회
- 金楨憲・崔淑伊 (2012) 「携帯メールにおける断り表現」 『일본근대학연구』 36, pp. 33-50. 한국일본근대학회
- 金潤淑 (2005) 「「依頼」に対する「断り」の述べ方—日本語母語話者と韓国人日本語学習者を中心に—」 『日本語學研究』 14, pp.19-32. 한국일본어학회
- 目黒秋子 (1998) 「「断り」のストラテジー分析—日本人、韓国人学習者、韓国人の比較—」 『日本語文学』 5, pp.137-156. 일본어문화회
- 申媛善 (2013) 「断りメールの構造と内容—日本語母語話者と韓国人学習者の比較—」 『日本語學研究』 37, pp. 53-68. 한국일본어학회
- 아오키사야카 (2012) 「한일 「거절」 표현의 대조연구 — 교재분석을 중심으로 —」 『언어과학연구』 61, pp.71-90. 언어과학회
- 元智恩 (2005) 「日本語と韓国語の断わりの構造—意味公式の配列順序の分析を中心に—」 『일어일문학』 28, pp. 69-76. 대한일어일문학회
- 元智恩 (2016) 「日韓両言語における断わりと受諾の一研究」 『일본문화연구』 60,

- pp.87-208. 동아시아일본학회
- 李先敏 (1999) 「断りの言語行動に関する一考察—韓國人と日本人の比較—」 『大邱産業情報大學 論文集』 13-1, pp. 252-267. 대구산업정보대학
- 李先敏 (2001) 「韓日大學生の断り行動の實態」 『大邱産業情報大學論文集』 15, pp. 65-77. 대구산업정보대학
- 이현정 (2011a) 「断り場面における韓日の断りへの意識—断り場面で用いられる素材や利益關係を中心に」 『동북아문화연구』 26, pp.495-511. 동북아시아문화학회
- 이현정 (2011b) 「断れた際を取る韓日の言語行動および不愉快さの考察」 『일본학연구』 33, pp. 415-440. 단국대학교 일본연구소
- 이현정 (2012) 「거절이유에 따른 부담도 및 거절전략의 한일대조 - 거절상대와의 상하·친소관계에 주목하여 -」 『동북아문화연구』 30, pp. 361-376. 동북아시아문화학회
- 임영철·김윤희 (2010) 「한일 거절표현의 구조에 대한 사회언어학적 접근」 『일본연구』 43, pp.525-540. 한국외국어대학교외국어종합연구센터 일본연구소
- 任炫樹 (2005) 「断り表現と表情の關係—日韓対照の観点から—」 『日本学報』 64, pp.161-178. 한국일본학회
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

河正一 (埼玉大学日本語教育センター非常勤講師)
徐明煥 (東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程)

カートグラフィー概観

國谷 光

【キーワード】

CP、カートグラフィー、機能範疇

【要旨】

本稿は、統語構造における範疇の精緻化を行うカートグラフィー的分析について、その研究が行われた背景と具体的な分析について研究動向の一部をまとめたものである。まず、Rizzi(1997, 2004)のCP分割仮説を紹介し、次に、カートグラフィー的なアプローチを踏まえた研究の一部を紹介する。

1. はじめに

機能範疇の精緻化を行う分析方法は一般にカートグラフィーと呼ばれるが、そもそも何故範疇の精緻化が行われたのだろうか。本稿では、まず、カートグラフィーの代表的な例であるCP分割仮説をRizzi(1997, 2004)が採用した背景について述べる。次に、カートグラフィー的な研究手法を用いた例として、Chinque(1999)、Rizzi and Shlonsky(2006)、Tanaka(2016)の分析を紹介する。

2. Rizzi (1997, 2004)におけるCP分割仮説

本節では、まずRizzi(1997)においてCP分割仮説が取られた背景と、その仮説がどのようなものかについて述べる。その後、Rizzi(2004)においてその内容がどのように改訂されたかについて述べる。

Rizzi(1997)は、現行の理論的枠組みでは節の種類は3種類の階層構造から成るとし、それぞれの階層はXバースキーマの様々な部分が具現化されたものであると述べる。

- (1) a. 語彙階層は動詞を主要部とし、 θ 役割の付与が行われる階層である。
- b. 屈折辞階層は動詞における具体的もしくは抽象的な形態的特性に相当する機能的主要部であり、文法項を認可する格や一致素性などに関わる。
- c. 補文化辞階層は自由機能形態素が典型的な主要部であり、主題となる要素や疑問詞、関係代名詞、焦点要素といった演算子となる要素を担う。

(Rizzi 1997: 281 (1))

Rizzi(1997)の CP システムを用いると、that 節は ForceP サイズの節を持ち、FinP との間に存在する FocP と TopP が活性化される一方で、to 不定詞節がそのような投射を持たず FinP サイズの節であると考えることが出来る。以下、ForceP は TopP や FocP を含みうるが、FinP の中には含まれないことを示している((6)の FinP は、煩雑さの軽減のため省略している)。

- (6) a. I believe [_{ForceP} that [_{TopP} this book [_{TP} he likes]]].
 b. I believe [_{ForceP} that [_{FocP} THIS BOOK [_{TP} he likes]]].
- (7) a. *I believe [_{FinP} Ø [_{TopP} this book [_{TP} him to like]]].
 b. *I believe [_{FinP} Ø [_{FocP} THIS BOOK [_{TP} him to like]]].

更に、この構造は Rizzi(2004)において修正される。Rizzi(2004)は上記の構造に加えて前置された副詞要素が生じる位置と理由を問う疑問語が生じる位置を分析し、(3)の構造を以下のように修正した。

- (8) Force Top* Int Top* Focus Mod* Top* Fin IP

(Rizzi 2004: 242 (60))

以上が Rizzi(1997, 2004)における CP 分割仮説の概略である。このように範疇を分割することで、補文の種類によってそれが導く節のサイズの違いを上手く説明できるようになるという点で、この分析は特に有益である。

3. カートグラフィー的分析法を用いた研究

本節では、カートグラフィー的分析法を用いた研究について、Chinque(1999)、Rizzi and Shlonsky(2006)、Tanaka(2016)の順に述べる。

まず、Rizzi(1997, 2004)と並ぶ代表的なカートグラフィー的分析法を用いたものとして、Cinque(1999)について触れる。Cinque(1999)は副詞句 AdvP の生起位置と法(Mood)、モダリティ(Modality)、時制(Tense)、アスペクト(Aspect)などの機能範疇の対応関係を詳細に分析した。特に、法やモダリティに関わる副詞に関しては、以下のように発話行為(speech-act)に関するもの、評価に関する(evaluative)もの、証拠性に関わる(evidential)もの、認識に関わる(epistemic)ものの順に生じることを示した。

- (9) [*frankly* Mood_{speechact} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential} [*probably* Mood_{epistemic} [*once* T (Past) ... (以下省略)

(Cinque 1999: 106 (92)、一部改変)

Cinque(1999)は、副詞の階層性をイタリア語、フランス語、中国語、英語、ノルウェー語、ボスニア語／セルボ・クロアチア語、ヘブライ語、アルバニア語、マダガスカル語などについても分析し、上記のような副詞の階層性を言語普遍的なものとしている。

Rizzi and Shlonsky(2006)は、英語における場所倒置構文の認可に **Fin** と主語基準が関わるとする。主語基準とは、主語が **TP** よりも高い範疇である **Subj** 位置に移動し、そこで主語が認可されると凍結を起こし、それ以上移動できなくなるという条件であるが、**CP** を分割した際の最下層である **Fin** がこの条件に関わっていると述べる。

(10) Into the room walked my brother Jack

(Rizzi and Shlonsky 2006: 342 (3a))

Fin には特別に名詞性を持った種類のものが存在し、それが **Subj** を含む句と併合することで主語基準を満たすと述べる。しかし、この名詞性を持った **Fin** が同時に [+Loc] という解釈不可能素性を持ち、指定部に場所表現を要求することで、場所倒置構文が生み出されると述べている。なお、Rizzi and Shlonsky(2006)は場所倒置構文において **Heavy NP Shift** が起こっている例についても同様の分析を用いて説明できることを示している。

以下、場所倒置構文における具体的な派生を示す。まず、文の派生段階として以下のような構造を想定する。

(11) Subj T be [sitting [my old brother][in the room]]

(Rizzi and Shlonsky 2006: 347 (17))

文法項である **my old brother** は主語基準を満たすために **Subj** 指定部に移動しうる。一方で、場所倒置構文が生じる場合、**PP** である **in the room** が **Subj** 指定部に移動するのではなく、以下のように名詞性と解釈不可能素性 [+Loc] を持つ **Fin+Loc** が **Subj** を含む句と併合し、主語基準を満たすと述べる。

(12) **Fin+Loc** Subj T be [sitting [my old brother][in the room]

(Rizzi and Shlonsky 2006: 347 (18))

更に、この **Fin** が解釈不可能素性 [+Loc] を認可するために、指定部に場所表現の **in the room** を要求する。

(13) In the room **Fin+Loc** Subj T be [sitting my old brother t]

(Rizzi and Shlonsky 2006: 347 (19))

このように、Fin が名詞性を持つと考える分析も存在する。

Tanaka(2016)は、Chomsky(2008)の議論に従い、フェイズに基づくカートグラフィーの構造を提案した。ミニマリスト・プログラムに基づく分析において、言語の計算はフェイズごとに行われ、C と v がフェイズと成り得ることが知られているが、Tanaka(2016)は CP のカートグラフィーにおいて Force と Fin がそれぞれ共にフェイズであることを述べた。Fin は TP に対して、格と φ に基づく関係(A-relation)を形成し、それに対して Force は TopP/FocP と共に談話に基づく関係(A'-relation)を形成すると述べている。具体的なメカニズムとしては、Fin は T に対して Agreement-Feature(AF) と Edge-Feature(EF)を付与することで文法項が主語位置へ移動し、Force は Top や Foc に上記の素性を付与することでそれぞれの指定部に主題要素や焦点要素が移動すると述べる。

例えば、以下のように補文標識 for に導かれる従属節は主題を取ることが出来ない。

(14) a. *I propose, these books, for John to read

b. *I propose for, these books, John to read

(Adger 2006: 10 (22))

Tanaka(2016)は、for が Fin 位置に生じる補文標識であるという Rizzi(1997)の分析を踏まえると、for に導かれる補文は最大でも FinP までの投射しか持つことが出来ず、CP field を欠いているためであるという分析が可能であると述べる。しかし、TopP はどの CP 領域においても独立に生じる投射であり、他の機能範疇の助けを借りることなく主題化が可能であるため、上記の例が適文であるという誤った予測を導いてしまうと指摘している。そこで、Force と Top が Feature Inheritance に基づく関係を持つと考えることで、上記の文の非文法性が説明できるとしている。

以上、本節ではカートグラフィー的分析法を用いた研究を紹介した。

4. おわりに

本稿では、機能範疇の精緻化を行うカートグラフィーの分析について、その研究が行われた背景と研究動向の一部を紹介した。なお、本稿で見たような分析法はミニマリスト・プログラムの点からの批判もあり、例えば Chomsky et al.(2017)では、獲得可能性(acquirability)と進化可能性(evolvability)を共に欠くとして、カートグラフィー的分析を批判している。

参考文献

- Adger, D. (2006). "Three Domains of Finiteness: A Minimalist Perspective". Lingbuzz. Retrieved March 1, 2018, from <http://ling.auf.net/lingbuzz/000296>

- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2008). "On Phases". In R. Freidin, C. P. Otero, and M. L. Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory. Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, pp. 134-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N., Gallego, Á. J., & Ott, D. (2017). "Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges." *Lingbuzz*. Retrieved March 1, 2018, from <http://ling.auf.net/lingbuzz/003507>
- Cinque, G. (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Rizzi, L. (1997). "The Fine Structure of the Left Periphery". In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, pp.281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, L. (2004). "Locality and Left Periphery". In A. Belletti (ed.) *Structures and beyond*, pp. 223-251. New York: Oxford University Press.
- Rizzi, L., & Shlonsky, U. (2006). "Satisfying the Subject Criterion by a non subject: English Locative Inversion and Heavy NP Shift". In M. Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation*, pp. 341-361. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Tanaka, H. (2016). "A Minimalist Analysis of English Topicalization: A Phase-Based Cartographic Complementizer Phrase (CP) Perspective". In *Journal of UOEH (The University of Occupational and Environmental Health)* 38 (4), pp. 279-289.

(埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程)

2017 年度研究大会

2017 年度研究大会は、以下の通りである。

- (1) 日時：2017 年 12 月 9 日（土）
- (2) 時間：13 時～18 時
- (3) 場所：埼玉大学教養学部 21 番教室
- (4) 研究大会の進行：司会（望月雅美・吉川巧也）、口頭発表（発表 35 分＋質疑 25 分）
 - ① 金善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「深い」と“深”の非空間的用法に見られる容器性について」
 - ② 國谷光（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「「のだ」を巡って－関係詞としての「の」の役割－」
 - ③ 牛雨薇（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「授業中日本語学習のモチベーションを高めるための協働的な授業活動の再考－
学習者の視点から－」
 - ④ 梁笑彤（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「無意志自動詞の可能表現に関する研究－中国人日本語学習者の使用状況を中心
に－」

「深い」と“深”の非空間的用法に見られる容器性について

金善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

日本語の次元形容詞「深い」と中国語の次元形容詞“深”の非空間的用法には、同じ用法も見られれば、違う用法も見られる。例えば、日本語の「深い」には「深い事情、深いわけ」のような用法が見られるが、中国語の“深”には見られない。このような違いが見られる背後には、日本語「深い」と中国語の“深”の意味の捉え方に違いが存在すると考えられる。そこで、本研究では、先行研究を踏まえた上で、「深い」と“深”の非空間的用法に見られる複数の意味を分析し、意味拡張、容器メタファーの視点から「深い」と“深”の空間的・非空間的用法に見られる複数の意味間の関係、容器性に対して対照を行い、非空間的用法に違いが見られる原因、認知プロセスについて考えてみた。

「のだ」を巡って

—関係詞としての「の」の役割—

國谷光（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、「の」補文の機能や性質を分析しながら「何故 Wh 疑問文では「の」が必要なのか」、「何故「のだ」文ではガノ交替が起こらないのか」という問題について論じる。まず、「の」補文と名詞修飾節が共に連体形を必要とすることに注目し、関係詞節を作る範疇 **Rel(ative)** が関わっていると考える。この **Rel** には連体形を認可する素性[+連体形]、被修飾語を要求する素性[+被修飾語]、自身を名詞として振る舞わせる素性[+名詞性]が備わっていると考える。続いて、**Rel** には音形「の」を伴う場合と伴わない場合があり、前者の場合には「の」補文、後者の場合には名詞修飾節や「こと」補文などが作られることを、**Rel** と「こと」の性質の違いに触れながら示す。更に、日本語の **Wh** 疑問文において「の」が必要となる理由と、「のだ」文においてガノ交替が起こらない理由を、**Rel** の素性を用いて分析する。

授業中日本語学習のモチベーションを高めるための協働的な授業活動の再考 —学習者の視点から—

牛雨薇（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、日本国内に滞在している第二言語学習者としての中国語話者を対象とする。授業中日本語学習のモチベーションを高めるために、学習者の目線に立って見直し、協働的な授業活動を再考する。さらに、具体的な授業案を提出し、検証したい。

事前調査は2017年11月09日に行った。当日、調査に参加した人数は8人の中国語母語話者である。事前調査の結果に基づいて、協力者が経験された協働学習とただいま実施されているピアリーディング授業を再考し、流れを改めて調整する。そして、毎回授業後、アンケート調査を行い、協力者の考えに参考し、担任の先生と相談しながら研究を進める。最後、授業の録音と個別インタビュー調査を分析し、協力者のモチベーションが上がるかどうかを検証する。

本番は1月9日から、3月23日まで、毎週の木曜日に行う。

無意志自動詞の可能表現に関する研究 —中国人日本語学習者の使用状況を中心に—

梁笑彤（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

日本語の「開く」、「降る」などの無意志自動詞、特にその可能表現は中国人日本語学習者にとって、習得が難しいとされる1項目である。行ったアンケート調査とインタビューの結果から見ると、中国人日本語学習者は無意志自動詞を使う時、無意志自動詞の基本形を非用するという傾向を明らかにした。例えば、日本語母語話者は「鍵がないので、ドアが開かない」と言うが、中国人日本語学習者は「開く」そのままを使わず、可能形を論じると考え、「開ける」、「開くことができる」などを可能形として使ってしまう。

本研究では、日本語母語話者と対照しながら、中国人日本語学習者の無意志自動詞の可能表現の学習状況を検討し、N1レベルの中国人日本語学習者が無意志自動詞を使う時、どのような傾向があるかをまとめたうえで、不適切な使用を改善し、無意志自動詞の可能表現をどのように習得していくかを明らかにすることを目的とする。

さいたま言語研究会

【会則】

1. 名称

さいたま言語研究会と称する。

2. 目的

本研究会は、埼玉大学における言語研究の発展に資することを目的とし、理論言語学言語教育実践まで、幅広く学術情報を発信する。

3. 活動内容

- (1) 年に1回（12月）、研究大会を開催する。
- (2) 年に1回（3月）、オンラインジャーナル（さいたま言語研究）を発行し、ホームページで公開する。
- (3) 年に数回、勉強会を開催する。

4. 運営委員（2016年度）

- (1) 顧問：小出慶一、仁科弘之
- (2) 世話役：金井勇人、川野靖子
- (3) 幹事：河正一
- (4) 勉強会：望月雅美、吉川巧也

【入会の手続き】

1. 入会希望の方は「入会申し込み」と明記した上、メールで以下の情報をお知らせ下さい。
 - (1) 名前（漢字及びローマ字）
 - (2) 住所
 - (3) 電話番号
 - (4) メールアドレス
 - (5) 所属（学生ではない場合は勤務先）
 - (6) 専攻分野
2. 本研究会では、年会費の徴収は行いません。ただし、研究大会の開催時に、参加者から参加費（500円）をいただきます。

『さいたま言語研究』

【投稿規定】

1. 投稿原稿の種類は、以下の3つとする。
 - (1) 研究論文：独創性と新規性があり、言語研究の進展に貢献する実証的もしくは理論的研究（12頁程度）。
 - (2) 研究ノート：言語研究を活性化させる契機となりうる知見や問題提起など（10頁程度）。
 - (3) 研究資料：言語研究に関する資料や情報など（8頁程度）。
 - (4) 解説論文：研究動向や研究トピックの解説など（8頁程度）。
2. 応募締切：毎年2月28日
3. 提出先：saitamagengoken@gmail.com
4. 結果：査読・検討の上、投稿者には3月10日までに結果を連絡する。
5. 発行：毎年3月31日

さいたま言語研究 第2号

発行日	2018年3月31日
発行者	さいたま言語研究会
Homepage	https://www.saitamagengoken.org/
E-mail	saitamagengoken@gmail.com

Saitama Gengo Kenkyu

vol.2

2018. 3